

ボワーは早速ウィリヤムを逮捕しました。

ウィリヤムを收監してから、其の下宿へ臨検しましたが、十圓金貨が十九枚と五圓金貨二枚とが隠してありました。それを例の紙片に合せて見ると、びつたりと符合するのです。

ボワーは例の紙片を専門家に検査して貰ひましたが、此の紙は、相當長い間、例の金貨を包んであつたものと云ふことが、判明しました。

ウィリヤムは極力犯行を否認しましたが、ボワーの熱心な捜査に依つて、不利益な證據が次から次へと顯れて來て、法廷で死刑の言渡を受けました。

之れが一片の紙屑から、犯人を探知するに至つたお話で、今日は之れだけにして置きませう。

裏をかゝれたスパイの話

一

世界大戦の間に、英國で、獨逸のスパイが盛に活躍したが、大抵は英國の官憲に氣附かれて、巧に裏をかゝれてしまつた。獨逸のスパイの手際も素晴らしいものだつたが、之れに對する英國官憲の防禦策には、一層目ざましいものがあつたので、結局、スパイを繞る争鬭に付ても、英國が勝つたと云つて宜いのである。こゝに書く話も、其の一例である。

二

世界戦争が始まつてから、十月程経た頃のことである。

ローランドと云ふ風采の立派な青年紳士が、倫敦東郊の船着場に着いた。米

國政府の旅券を持つて居て、紐育のピアノ會社の囑託社員で、自分自身は音楽家だと云つて居た。成程、其の英語には米國の訛りがあり、紐育の會社の書類も澤山持つて居たから、疑を挟む餘地はないやうだが、實は此の男は米國からまつ直ぐに渡つて來たのではない、和蘭から英國へ向けて出立したのであつて和蘭出立當時、同地に出張中の英國官憲が、既に怪しいと睨んで居たのであつた。勿論そのことは、倫敦の警察本部に通知をして置いたが、當の本人は、それには少しも氣が附かない。

扱、倫敦東郊の船着場で、型の如く、旅券の検査があつた。此の男の持つて居るのは、前にも書いた通、米國政府の旅券だが、之れが眞つ赤なにせ物、即ち贋造旅券だつた。併し、實に精巧に出來て居るので、一寸見たゞけでは、勿論わからないが、米國政府の紋章の鷲の爪が、少し不出來で、本物と微細な點に於て、相違して居た。炯眼な英國の官憲は、それを看過しなかつたが、わざと氣の附かない風を裝つて、検査を無事に済ませたから、當の本人は、自分が注意人物になつて居ることには氣が附かないで、倫敦の中心に乗込んだ。

三

倫敦へ著いてから、ローランドは一人の美人と、或はホテル、或は舞踏會、或は劇場、或は料理店と、衣香扇影の間を逐つて、頻に活躍したが、美人の派手姿をおとりとして、言ひ寄る紳士連中から、軍事の機密を探ることを其の目的としたことは、云ふまでもない。此の美人は婚姻に依つて英國の國籍を取得した者で、今は英國人ではあるけれども、其の素性はいかゞはしい。此の怪美人を手頼つて、ローランドは英國に渡つて來たのであつた。

四

倫敦の警察本部は彼等兩人の活動を、遠くから、それとなく、目を付けて居た。暫くは、爲すがまゝにまかせて、確證を掴んでから、逮捕する考で、急がず、慌てず、犯人には決して知れないやうに、細心な注視を怠らなかつた。こゝいらがいかにも英國式である。

二人のスパイのうちで、女は蘇格蘭へ行つて、男は倫敦に残つて居る。女は例の美貌を利用して、いろんな秘密を聞き込んで、それを倫敦に居る男に報告する。男はそれを和蘭のピアノ會社へ——此のピアノ會社は實は獨逸のスパイの本部だが、それもとづくに英國の官憲にわかつて居た——通知する。ピアノ會社への手紙は普通の商業上の報告書で、ピアノを賣つたとか、送つてくれとか云ふことに過ぎないが、其の手紙は悉く没收になつた。ローランドが發送する毎に、いつも没收になつて居たのである。普通の商業上の報告書の文句は普通のインキで書いてあるが、其の行と行との間に、あぶり出しのインキで、探知した秘密が記載してあるのだつた。あぶり出しのインキと云ふのは、子供のおもちゃにもあるが、或一種の無色の液體で書くと、無色だから、そのままでは、何にも見えないが、火であぶると、文字が褐色になつて出て來るのである。ローランドは英國の官憲に氣附かれなれないと思つて居たが、斯様な幼稚なスパイの手段は、英國の官憲には、わかりきつて居た。十分に確證を握つた上で、英國の官憲は遂に彼等兩人を逮捕した。何しろ、證據を掴まれて居るのだから、

犯人は自白するの外はなかつた。

果せるかな、ローランドは獨逸のスパイで、ブレイコウと云ふ者だつた。長らく米國に居たので、米國人に化けるのに都合がよかつたのである。例の怪美人は、ウエルハイムと云ふ、矢張獨逸系の女だつたのである。

裁判の結果、ローランド事ブレイコウは死刑、怪美人ウエルハイムは十年の懲役に處せられた。

ブレイコウの死刑は、軍事犯だから、銃殺の刑であつたが、ブレイコウの最後は、實に見苦しいものだつた。泣き叫んで、勘辨して貰ひ度いと云つたが、勿論許される筈がない。然るに、彼は銃殺の直前に、ぐつたりとなつて、死んでしまつた。所謂失神の死である。怪美人ウエルハイムは監獄のなかで病死した。

寶石を隠した話

一

どこの國でも、いゝ女中と云ふ者は、なか／＼見當らないものだが、殊にアメリカでは、女中難の聲が一としほ高いやうである。一寸氣の利いた女は、事務員になつたり、工場で働いたりするから、女中に来るのは、安心の出来ない伊太利女か、さもなければ、黒人と云つたやうな工合で、よく働いて、正直で、身綺麗で、仕事が上手と云ふのは、まづ以て稀有である。

斯かるアメリカに於て、某市の郊外に住んで居るブラムベット氏は、結構過ぎる程結構な女中に有り附いた。英國やアメリカでは、女中は大抵レフェレンス——多くは前の雇主の證明書である、此の女を自分は何年間使つて居たが、實直に働いて呉れたと云つたやうな紹介狀式の證明書——を持つて、新しい雇

主の許へ行くのだが、ブラムベット氏の新しい女中の持つて來たレフェレンスは素晴らしいもので、官公吏、商工業者、いづれも第一流の人々の推奨の文字に充ちて居る。音にレフェレンスがいゝばかりでなく、此の女中は眞に模範的理想的の女中で、勤勉で、伶俐で、正直で、殊に料理に卓越した腕前を持つて居た。

此の立派な女中の名をリディアと云ふ。

二

リディアが來てから、一と月ばかりたつた頃のことである。

ブラムベット氏夫妻は、夕食の席に就いて居た。スープから魚、魚から獸肉と、次々にリディアの運んで來る料理に、舌鼓をうつて、夫妻はのんびりした氣持になつて居ると、急に電話がかゝつて來た。リディアが電話口へ行つたが、其のまゝ電話に受け答へして居るから、電話はリディアへかゝつて來たものと見える。何かいろ／＼云つて居たやうだったが、リディアが、『そう？ 困つた

ものね、姉様のリュウマチは、私は忙がしいのですがね、いづれそのうち、一寸おひまを頂いて、お見舞にあがりますよ、お大事にね、はい、はい、さやうなら。と云つた聲だけは、はつきりと聞こえた。リディアには姉があつて、其の姉がリュウマチで困つて居るものと見える。

電話が済むと、リディアはすぐに、二階へ上つて行つたやうだつた。女中部屋は二階にあるのだから、リディアは自分の部屋へ行つたのだらう。まもなく又降りて来て、臺所へはいつて行つた。臺所へはいるや否や、何か、どたんばたんと、けたましい響を立て、居たが、電気冷凍器の戸を、びしやりと閉める音がした。リディアは前にも書いた通り、料理に勝れた腕を持つて居る、殊にアイスクリームの製造は、上手でもあり、自慢でもある、電話で一才遅れたので、急いで、アイスクリーム製造の妙腕を揮つて居るのであらう。

三

プラムベツト夫妻の夕食が済んだ頃に、數人の警官がどか／＼とはいつて來

て、突如として、リディアを逮捕した。リディアは國際ギャングの一員、しかも其の妻腕の一方の旗頭で、寶石泥棒團の女首領である、少くとも、其の嫌疑濃厚なるによつて、逮捕引致すると云ふのであつた。

リディアが引致せられた後、警官はリディアの部屋は勿論、プラムベツト家の隅々に至るまで、隈なく捜査したが、リディアや其の配下の者が諸方で盗んで來て、リディアが隠して居る筈の多數の寶石が、一つも出て來ない。

物的證據が出て來ないと、犯罪捜査は進展しない。警官もこれには弱つた。

四

プラムベツト家では、已むを得ず、別の女中を雇ひ入れた。これは山出しの女で、正直な代りに、一向埒の明かない女中だつた。

プラムベツト氏は、此の女中の拵へたまづい夕食を、にが／＼しく食つてしまつて、氷入りの紅茶を、やけ氣味に、がぶりと飲むと、何か固いものが、口のなかで、ざく／＼する。驚いて、吐き出して見ると、それは十數顆の高價な

寶石だった。

五

リディアは果して、寶石泥棒の首魁だったのである。

暫く行衛を晦ます爲に、女中に化けて、ブラムベット家に住み込んで居たのだが、例の立派なレフェレンスは悉くお手のものゝ偽造書類だったのである。

例の電話は仲間の者から、警察がどうも我々に気が附いたらしいから、警戒しろと云つて来たのであつた。そこで、彼の女は寶石を電気冷凍器の中へ隠して、其の上に水をかけて置いた。成程、安全な隠し場所である。扱、冷凍器の中だから、其の水が氷つて、氷のなかに、寶石は包まれて居た。その氷を新しい女中はぶつかいて、紅茶のなかに入れたので、ブラムベット氏は、あはや數百萬圓の寶石を飲んでしまふところだつたのである。

夏の夜の夏話

一、高山と法律

一

夏になると、誰でも山を思ふが、高い山が裁判上の問題となつたことがある。法律上高山の定義如何、と云ふことが、問題となつたのである。自然科学の上ならば、いざ知らず、法廷に於て、法律家に依つて、高山の定義が論議せられたのだから、面白い。しかも、それが高山國の瑞西で問題となつたのだから、一入面白い。

二

或瑞西人が、瑞西の保險會社と生命保險の契約をした。此の瑞西人は登山俱

樂部の會員で、道樂か、本職か、兎に角、よく山へ登る。そこで、其の保険約款に依つて、高山に於ける事故に因つて死んだ場合には、保険金は支拂はないと云ふことにした。保険金を支拂ふべき保険事故を、制限的に定めるのは、よくあることで、火災保険で、地震に因る火災を除外するやうなものである。つまり、此の瑞西人はよく高山に登る、高山は勿論平地よりは危険が多いから、特別に高率な保険料を徴收しない限、高山に於ける事故に因る死亡を除外することにしたのは、まづ以て合理的である。當の本人も此の約款は承諾して居たから、斯かる約款の存否に付ては、當事者の間に争がない。

三

然るに、被保険者たる當の本人は、瑞西に隣接する佛國サヴォア州のロング山に登つた時に、岩の碎片に當つて、死んだ。能く泳ぐ者は能く溺れると云ふ類か、登山の名人も、遂に屍を山の一角に横へたのである。保険会社では果せるかなと思つたことだらう。

四

死亡者の相続人は保険會社を相手取つて、ジュネーヴの地方法院に、保険金請求の訴を提起したが、保険會社は例の約款を引用して、保険金を支拂ふべきものに非ずとの抗辯を提出した。

約款のことは前に書いたが、約款には、たゞ「高山」とあるだけで、高山の定義は示して居ない。そこで、ロング山が約款に所謂高山に該當するか否や、即ち、此の約款に關する限に於て、吾人の常識と條理とは、高山に如何なる定義を與ふべきものであるか、之れが、此の事件に於ける唯一の争點となつた。

五

扱、問題のロング山は、海拔七千八百五十尺である。

最初の裁判所では、ロング山を高山だと判定して、原告に保険金請求の權利なしとの裁判を下したが、原告は之れには不服で、事件は遂にロザンヌの最高

法院に持ち出された。

六

ロザンヌの最高法院は、下級審の判決を破毀して、みづから高山の意義を確定した。それに依ると、高山たるには、万年雪と氷河との二要件を具備して居なければならぬと云ふのである。然るに、ロング山には、万年雪もなければ氷河もない、従つて、高山ではない。被保険者は高山に非ざる山で死んだのだから、保險會社は保險金を支拂はなければならない。之れが、其の判決理由の要領である。

此の判決の下つたのは、大正十三年の秋である。

七

此の判決の當不當は別問題として、流石に高山國の法廷だけあつて、高山の法律上の意義を闡明するに當つて、其の要件を万年雪と氷河とに求めたことは、

眞に壯烈である。標準がいかにも高い。私も丁度此の事件が法廷の問題となつて居た頃、瑞西に暫く滞在して居たのであるが、天を摩する連峰が眉に迫るあの國では、成程七千八百尺位のロング山は高山に非ずと認めるのが、相當かも知れない。

併し、瑞西最高法院の下した高山の定義に依ると、瑞西以外には、高山と云ふものがいくらかも無いことになる。日本にはあるまい。私は嘗て臺灣へ旅行して、中央山脈を麓から見上げた時に、随分高いと思つたが、之れもどうも不合格らしい。法理に國境なしと云はれるが、それは眞理であるかも知れないけれども、裁判には、慥に國境がある。あつて然るべきものである。

二、ジエアン・ポール・マラーの妻と妹

一

夏になると、風呂へ入るのが、何よりの楽しみである、其の日の汗をさらりと流して、夕方の涼風に對すれば、一榻の貧しきに座して、尙且極樂の氣持は

するが、此の風呂で殺された人は、尠くない。何しろ、身に寸鐵を帯びて居ないのだから、殺す方から云へば、卑怯なことではあるが、屈竟の機會である。希臘の傳説に従へば、トロヤ征討軍の元帥、希臘諸邦の霸王、アガムノンに殺されたのも、浴室である。十年の苦戦功を奏して、故國に凱旋した當夜、不義の王妃クリテムネストラと其の情人エギストスとの爲に、入浴中に弑された。我國でも、源義朝は矢張風呂場で殺されたのである。

二

佛國革命の大立物、ジェアン・ポール・マラーも、風呂場で、若い美しいシヤロット・コルデイに刺し殺された。併し、之れは、特に入浴の好機を覗つて殺したのではなく、其の頃、マラーは一日の大部分を風呂の中で過ごして居た、マラーが反對黨に逐はれて、巴里の下水に隠れて居た時に患つた皮膚病が、だん／＼嵩じて來て、炎症がひどくなつたので、極左黨の旗頭、破壊主義の張本人、慘虐の權化のマラーも、流石に自分の病氣には閉口して、一七九三年の

六月一日から、自宅の風呂に入り浸つて、風呂の中で、客にも逢ひ、事務も執つて居たのであつて、其の年の七月十三日、午後七時過に訪ねて來た未知の年少婦人、シヤロットと、矢張そこで面會して、小刀で胸を刺されて、斃れたのである。(美しい刺客の話参照)

何事にも極端だつたから、マラーの逸話には、奇抜なことは多いが、こゝには、其の身邊を彩つた二人の婦人に付て、書いてみる。

三

マラーは、シモンヌと云ふ若い女と同棲して居た。夫婦として同棲を始めたのは、マラーが四十六、シモンヌが二十六の時、一七九〇年のことである。

マラーは親の代から醫師で、ニュウシャテルで生まれ、ボルドウで勉強し、巴里で職に就いて居たのだが、倫敦で大分景氣好く開業して居たこともあつて、資産も相當にあつたのだが、革命運動にすつかり注ぎ込んで、機關新聞の『民友』を發刊した頃には、殆ど無一文になつて居た。それを献身的に輔佐したの

が、シモンヌで、マラーが反對黨の壓迫を受けて、下水に逃げ込み、致命的の皮膚病に罹つた時には、シモンヌは身命を賭して、其の介抱をしたので、マラーは感激して、遂に、互に相許すに至つたのである。

四

シモンヌの容姿に付ては、丈稍高く、目も毛髪も褐色、前額尋常にして、口大きく、頤圓く、鈎鼻で、顔は卵形だつたと文献にあるが、特に美しかつたと云ふ證據はない。マラーの晩年の住居はシモンヌの名義で借りて居た。シモンヌはマラー一家の女主人公であり、同時に、マラーの秘書だつたのである。シモンヌは右に書いたやうに、美人ではなかつたらしいが、マラーを殺したシャーロットは、優しい可愛らしい清楚な婦人だつたやうである。革命裁判所の記録には、『風貌粗野ニシテ、舉止ニ女性ノ優シ味モ品位モナシ、』とあるけれども、それはシャーロットを憎んだ結果の偏見であつたことは、死刑執行の直前に寫生した畫家であり、又士官だつたハウエルの繪に依つても、將た又多く

の史家の言説に徴しても、窺ひ得られる。殊に近年發見せられたカーン（シャーロットの住所地）の司書マンセルの手記（それはシャーロットの生前に親しくして居た或婦人の口授したもの）に依ると、『小サキ痘痕アリ、丈ハ稍々高キ方、艶麗ニハ非ザルモ、實ニ優シク、何人モ一見直ニ愛着ノ念ヲ禁ズル能ハズ、彼女ハ眞ニ神明ノ天使ナリキ、』とあるから、右の革命裁判所の記録の信用し難いことは、云ふまでもない。

五

シャーロットがマラーを刺した時は二十五歳、シモンヌは既に二十九歳、しかも、彼れは美しく、此れは平凡な容色である。シモンヌの方では、愛人が自分よりも若くて美しい女を浴室で引見して居るのだから、いくらか氣懸りだつたと見えて、マラーとシャーロットとの短い會談の間に、シモンヌは一度浴室へ入つて見た、尤も一寸した家事上の相談もあつたのだが、女性に有り勝ちな一種の心配に唆られたものらしい。熱狂漢マラーと終生を契つたシモンヌも、

流石に女は女である。

六

マラーとシモンヌとは、正式に婚姻はしては居なかつた。諸國に於て、大抵は婚姻の成立要件に、一定の方式を定めて居る、原始的の民族の間に於てすら、一定の方式に依つてのみ、婚姻の效力を認める事例は、寧ろ多いのであるが、自分達の婚姻関係を他人に紊されない要心として、自分達の間には婚姻關係の成立したことを公示するのが、此の方式の抑々の濫觴らしいが、畢竟するに、婚姻は人生の大事である、従つて、相當の方式の下に行はれることを必要とするのは、諸國概ね其の揆を一にするところである。

然るに、マラーは破壊主義の張本人である。白を黒とし、黒を白とし、柳を紅と云ひ、花を緑と云ひ度い男である。婚姻の方式に關する風習を破却する位のことには、朝飯前である。彼れは在來の方式を蹂躪して、彼れ自身の方式を創設した。

彼れの執つた方式は、斯様である。彼れは突如として、シモンヌを訪ね、其の兩手を握つて窓際へ連れ出し、天を仰いで云つた。「私は宏大な自然の殿堂に於て、私の誠實をこゝに誓ふ、之れを聽こし召す上天則ち我等の證人である。」彼れは又或機會に云つた。「自分は天氣晴朗の日、白日を證人として、婚姻の式を擧げた。」

七

一切を破壊せむとしたマラーは、在來の婚姻の方式をも破壊したが、彼れはシモンヌと終世を契つたのであつて、米國式の友愛婚を行つたのではない。佛國革命當時でも、流石に友愛婚は發明せられて居なかつた。

加之、マラーが白日を證人として婚姻の式を擧げてから後に、正式に婚姻の手續をする考があつたらしく、一七九二年の元旦に、シモンヌに約婚の證書を與へて居る。此の證書はマラーの死後發見せられたものだが、七十字餘りの簡潔で、しかも雄渾な文字に依つて、シモンヌの好意に對して、滿腔の謝意を披

瀝し、自分は之れから倫敦へ行くが、歸つたならば、すぐに此の約婚を實現する旨を明示し、最後に、『予ノ衷心ノ愛情ハ予ノ誠實ヲ保證スベシ、若シ此ノ約婚ニシテ實現セラレズトセバ、予ハアラユル誹謗ヲ甘受スベシ』と結んである。併し、正式の手續は執られなかつた。尤も、シモンヌは終世マラーの妹と一緒に暮して居た。

八

マラーの妹アルベルテイーヌも、マラーの家に居た。此のアルベルテイーヌは徹頭徹尾、兄のマラーに心酔して居て、マラー程えらい者は、世の中には斷じて無い、と確信して居た。

アルベルテイーヌは又醜婦だつた。學殖があり、拉丁語に通じて居たが、容色は甚だ勝れない方だつた。恐怖時代の立物、ダントン、マラー、ロベスピールの三人はいづれも好男子ではなかつた、ダントンはまだしも男らしい風貌だが、ロベスピールは普通以下、マラー、殊に其の發病後のマラーに至つては、

寧ろ醜怪の極致である。アルベルテイーヌの七十四歳の時に、其の佗住居に彼女を訪れた人の書いたところに依ると、薄暗い部屋で、彼女に逢つた時に、自分はマラーの亡霊かと思つたとある、能く似た兄妹だつたに相違がない、醜い兄に能く似て居たとすれば、此の妹も餘程醜い女だつたらしい。

九

アルベルテイーヌは終生結婚しなかつた。其の理由は面白い。自分が結婚すれば、マラーと云ふ姓を失はなければならないが、マラーと云ふのは、自分の畏敬する兄の姓で、光榮ある姓である、此の光榮ある姓を失はざらむが爲に、自分はどこ迄も、獨身で、一生を貫くと云ふのである。アルベルテイーヌが兄のマラーに心酔して居たことは、前に書いた、此の心酔が則ち彼女の獨身の原因である。

成程、大抵の國では、女子が婚姻すれば、婚家の姓を承けて、實家の姓を失ふ。併し、今日では、慣習上、妻が婚家の姓と實家の姓とを併用することを許

す國もある。日本流に翻譯すれば、伊藤花子が後藤家に嫁すれば、後藤伊藤花子と名乗ることが出来ることと云つたやうな工合である（勿論日本では是認せられないが）。又、法律上、婚家の姓でも、實家の姓でも、自由に選擇し得る國がある。破壊主義のマラーの妹も、そこ迄は氣附かなかつたものと見える。

アルベルティーンは、晩年は時計の針の細工を内職にして居たが、一八四一年に、八十三歳で、極度の貧困の裡に死んだ。

三、死刑の歴史

一

死刑制度の存廢に付ては、大に議論があるけれども、其の問題には觸れないで、夏の夜の語草として、こゝには、其の沿革と種類とに付て書く。

二

今日の文明國に於ける死刑の方法は、絞首、斬首、銃殺、電氣裝置、瓦斯應

用の數種類に限定せられて居るけれども、昔は其の手段が多様だつた。そして、今に比べて、其の方法は、多く残忍を極め、凄惨の限を盡して居た。西洋人は、之等の苛酷な刑罰は大抵東洋から傳來したのだと云つて居るが、或は左様かも知れない。併し、之れを以て、東洋人が西洋人よりも惨虐だと云ふ證據とすることは出来ない。東洋の方が西洋よりも早く開けたのだから、大抵の制度は、東洋から西洋へ流れて行つたのであつて、死刑の方法も、矢張其の一つだつたのである。暴戻なことを責めるのは宜いが、少くとも、模倣者には、發明者を攻撃する権利がない。

三

上代に於ける死刑の方法には、書くだに忌まはしき残忍なものが多い。生きながら皮を剥いで、烈日に曝したり、鳥の啄むに任せたりしたが如きは、こゝに詳しく書く勇氣がない。

毒蛇の窟に投じたことは、東西の史乘に、其の證跡が尠くない。七九四年に、

英國ノ一ザムブリヤの王がティーン人の酋長を、蝮の洞穴に投げ込んだと云ふ傳説は、當時の英國に此の種の死刑の行はれて居たことを示すものである。獅子に食はせる方法は、羅馬に行はれて居た、象に踏み殺させる死刑もあつたのである。

高い所から下の岩角に投げ付けて殺すことも、行はれて居た。第十一世紀の初に、ノルマンディーのロバートがルアンの長老コナンを塔の上から下へ叩き付けたのが、其の一例であつて、エディンバラの巖上の城は、此の方法には、屈竟の場所だつたことは、文献に明白である。

石を投げ付けて殺したこともあつた。殉教者ステイヴンの悲惨な物語はここに説くまでもない、此の方法は第十世紀の頃までは、殆ど歐洲全土に亘つて、採用せられて居たのである。

磔刑も世界的だつた。之れには二種あつて、たゞ十字架に釘付けにして、苦しむだけ苦しませて、自然に死ぬるまで、其の儘にして置いたのもあれば、槍や刀で刺し殺したのもあつた。基督の例は前者であり、徳川時代の江戸の仕置

は後者である。

毒を飲ませることもあつた。ソクラテスに對する死刑が、それだつた。

四

中世紀も残忍なことに於ては、決して上代に譲らなかつた。

上代から中世に亘つて、殆ど世界的に行はれた死刑の方法に、火刑がある。歐洲では異端罪や魔法使に、此の刑罰が課せられた、之等の囚人の屍體は宗教上の理由で、埋葬を許されなかつたし、殊に魔法使に付ては、若しそれを埋葬すると、墓場で、外の屍體を誘惑すると云ふ迷信が行はれて居たが爲に、生きながら焼かれたのである。それから、姦通罪に對して、火刑を以て臨んだことは、諸國に普遍的な現象だつたが、英國では、夫を殺した妻を特に火刑にした、其の規定が一八二八年まで續いて居たのだから、驚かされる。尤も、流石は英國人で、近世に於ては、實際に火を附ける前に、首を絞めたので、火刑と云ふよりも、絞殺と火葬とを一緒にやつたやうなものだつた。國に依つては、一と

思ひに焼いてしまはずに、一寸焼いては中止し、一寸焼いては中止して、永く苦しませた所もあつた。

火刑と對立するものは、釜茹の刑である。支那には「湯饒甘如飴」と云ふ文句がある位だから、隨分行はれたものであらう。我國では、石川五右衛門の話は眉唾物としても、戦國時代に行はれて居た形跡がある。佛蘭西では革命の前まで存して居り、英國ではヘンリー八世の朝、一五三〇年に毒殺罪に對する刑罰を火刑と定めたが、其の法律は十六年間實施せられたゞけである。此のヘンリー八世は種々の意味に於て有名な國王であつて、其の治世は一五〇九年から一五四七年に直つて居るが、此の三十六年間に、絞殺ではあるが、鬼に角死刑臺で首を絞められた者の數が、無慮七萬に上つたと云ふ、盛なことではある。

鋸引と云へば、我國でも、武家の世には行はれて居たやうであるが、佛蘭西は近世に於て、其の植民地ニユウオルレアンで、實施して居た。直接に鋸で引くのと、函に入れて函ぐるみ二つに引くのと、二種の方法が諸國にあつたのである。

五

中古の死刑で残忍を極めたのは、四肢を絶つ方法だが、それが又いかにもひどい手段で、囚人を大の字形に仰臥せしめて、身體は勿論地面へしつかりと縛り付けて置く、そして、四頭の馬に、四肢をそれぞれ一つづつ引つ張らせて、馬に鞭を當て、疾驅せしめる、右手を引つ張つた馬が、右へ走り、左手を引つ張つた馬が、左へ駆ける、そこで右手が右の方へ、左手が左の方へ、抜けて行くのである。一七五七年にダミアンと云ふ大馬鹿者が、佛蘭西のルイ十五世に危害を加へた廉に依つて、此の刑罰に處せられたが、馬が一時間以上も引つ張つて居たが、手足が餘程頑丈だつたと見えて、なか／＼抜けない、ダミアンは泣き狂つて居る、馬も大汗になつて居る、當時の死刑は勿論公開だが、見物人は泣き狂ふダミアンよりも、大汗になつて努力して居る馬に、同情したとのことである、どうしても埒が明かないので、議會附屬の醫師の進言に基いて、肩と腰との筋肉を少しづつ切つて、それから又馬に引つ張らせて、漸くにして、

思ひに焼いてしまはずに、一寸焼いては中止し、一寸焼いては中止して、永く苦しませた所もあつた。

火刑と對立するものは、釜茹の刑である。支那には「湯鑊甘如飴」と云ふ文句がある位だから、隨分行はれたものであらう。我國では、石川五右衛門の話は眉唾物としても、戰國時代に行はれて居た形跡がある。佛蘭西では革命の前まで存して居り、英國ではヘンリー八世の朝、一五三〇年に毒殺罪に對する刑罰を火刑と定めたが、其の法律は十六年間實施せられたゞけである。此のヘンリー八世は種々の意味に於て有名な國王であつて、其の治世は一五〇九年から一五四七年に亘つて居るが、此の三十六年間に、絞殺ではあるが、鬼に角死刑臺で首を絞められた者の數が、無慮七萬に上つたと云ふ、盛なことではある。

鋸引と云へば、我國でも、武家の世には行はれて居たやうであるが、佛蘭西は近世に於て、其の植民地ニュウオルレアンで、實施して居た。直接に鋸で引くのと、函に入れて函ぐるみ二つに引くのと、二種の方法が諸國にあつたのである。

五

中古の死刑で残忍を極めたのは、四肢を絶つ方法だが、それが又いかにもひどい手段で、囚人を大の字形に仰臥せしめて、身體は勿論地面へしつかりと縛り付けて置く、そして、四頭の馬に、四肢をそれぞれ一つづゝ引つ張らせて、馬に鞭を當て、疾驅せしめる、右手を引つ張つた馬が、右へ走り、左手を引つ張つた馬が、左へ駈ける、そこで右手が右の方へ、左手が左の方へ、抜けて行くのである。一七五七年にダミアンと云ふ大馬鹿者が、佛蘭西のルイ十五世に危害を加へた廉に依つて、此の刑罰に處せられたが、馬が一時間以上も引つ張つて居たが、手足が餘程頑丈だつたと見えて、なか／＼抜けない、ダミアンは泣き狂つて居る、馬も大汗になつて居る、當時の死刑は勿論公開だが、見物人は泣き狂ふダミアンよりも、大汗になつて努力して居る馬に、同情したとのことである、どうしても埒が明かないので、議會附屬の醫師の進言に基いて、肩と腰との筋肉を少しづゝ切つて、それから又馬に引つ張らせて、漸くにして、

目的を遂げた。

次に風變りなのは、壓殺の死刑である。それは囚人を仰臥せしめて、鐵の分銅を腹の上へ載せる、そして漸次其の分量を増して、徐々に死に至らしめるのであるが、英國往時の壓殺死刑の言渡のお定まりの文句は左の通である。

「お前は今朝お前が來た牢獄へ歸される、其の牢獄の日の光の來ない眞暗な穴倉の板敷に、お前を仰臥せしめる、腰にだけは許すが、其の餘の全部の衣類を剥いで、眞裸でお前を寝かせて、腹の上にお前の耐え得るだけの分量の鐵の分銅を載せる、それから次第に其の分量を殖やす、尤も、初日には、此の世に於ける最劣等のパンを三片與へる、二日目には、パンの外に、牢獄に最近い井戸の水を三杯與へる、此のパンと水との支給は、お前の死ぬるまで續ける。」

此の外に、窒息殺の死刑もあつた。軽い灰の中に顔をつつ込ませたり、硫黄の煙を嗅がせたりした。

絞首は今でもやつて居るが、中世では、絞首臺を用ひないで、死刑執行者が二人、左右からぢかに、囚人の首を絞める方法も採つて居た。蘇格蘭では比較

的多く、此の手段が行はれて居たやうである。絞首後、永く屍體を其の儘にして、衆人の前に曝すことは、見せしめの爲に、諸國に行はれて居たことで、英國では、制度上、此の見せしめが一八三四年まで續いて居たのである。西班牙では、ガローットと云ふ絞首具が近年まで用ひられて居たが、之れも原始的な絞首方法の一つに屬する。

其の外に、水に投ずるのもあり、ギロティンで切るのもあり、亞米利加に於ける黒人に對する私刑の方法に至つては、凄慘口にするを忍びないものもあるやうである。

銃殺も今行はれて居るが、第十九世紀の中葉に、英國の官憲が印度の叛徒を處罰した時には、囚人の口へ鐵砲をつゝ込んで發射したと云ふことである。成程、之れならば外れつこはない。

六

書けば際限もないが、斯様なことを書いて居ると、夏の土用の中でも、涼し

いどころか、寒くなる。史策の筆をこまに擱いて、現代に付て書いてみる。

七

現時の文明諸國では、死刑を存置するものと撤廢したものと岐れて居るが、存置國でも、其の方法は前にも書いたやうに、絞首、斬首、銃殺、電氣裝置、瓦斯應用の數種類に限られて居る。

北米合衆國は州に依つて法規を異にして居るから、一樣ではないが、全體的に云つて、右に掲げた數種の方法を悉く採用して居るのは、北米合衆國だけである。同國中、死刑を存置する州は四十、(撤廢州は八)、其の四十のうちで、絞首刑の州が二十三、電氣刑が十五、ユター州は囚人の選擇に依つて絞首又は銃殺のいづれかに定める、ネヴァダ州は瓦斯刑である。一九二五年の統計に依れば、合衆國全體で、死刑になつた者が、百二十三人、其の中で、八十人が電氣刑、四十一人が絞首刑、二人が銃殺刑になつて居る。

八

電氣刑を最初に採用したのは、ニューヨーク州で、一八九一年のことだが、滑稽なことには、之れは或電氣會社の商略上の宣傳の結果だと云ふことが、事實だそうである。

電氣刑は苦痛を伴はないと云はれて居るが、佛蘭西のロタ教授が、一九二八年の一月十四日に、英紙デーリーメールに發表したところに依ると、之れは決して望ましい方法ではないやうであつて、多くの學者は、寧ろ瓦斯刑が此の點に於ては適當だと云つて居る。

今様女殺油地獄の話

一

これは一九二八年の犯罪事件で、維納の警察の成功物語である。周到な手堅い捜査の一例として、こゝに掲げる。

二

維納の郊外に、大きな動物園がある。動物園と云つても、上野公園の動物園よりも、寧ろ小石川の植物園を想像せられ度い、森もあり、谿もある、大きな広い地域である。

一九二八年の七月十七日は妙な天候の日だった。朝は、氣持の好い晴天だったが、正午頃には、遽に蒸し暑くなつて來た。夕刻になつて、黒い雲が空を包

んで、凄じい嵐が起つた。雷鳴か、急雨か、と思ふ間もなく、天地を閃裂するやうな雷鳴と車軸を流すやうな急雨とが、一緒になつて、やつて來た。其の荒天の下で、森の彼方に、一ときわ高い物音がして、ぱつと怪しげな煙が立つた。派出所の警官が駆け付けて見ると、一人の若い女が倒れて居る。

三

女は前額から後頭部へかけて、ピストルの銃傷を帯びて居た。即死したものらしく、其の容貌には、苦悶の痕を残して居ないが、頭髮から顔の半分に互つて、揮發油をぶつけて、火を附けてあつた。着物も餘程焼けて居る。思ふに、犯人は、被害者が誰だかわからないやうにする爲に、殺してから、すぐに、油を注いで、火をかけて、身體全部を黒焦げにするつもりだつたらしいが、豫期しない急雨の爲に、半焼の程度で、火は消されてしまつたのである。

被害者は綺麗な女だった。十人並以上で、之れならば、どの新聞でも、美人の怪死と、堂々と題する値打はある。年の頃は三十位。容貌から推測し、且、

年齢から忖度して、痴情が原因であることは、何人も容易に想像し得るところであつた。

顔も美しい、手も美しい、皮膚にも、頭髮にも、特別の注意を怠らない女だつたと見えて、すべてが綺麗だつたが、殊に齒の手入れが十分で、上と下とに、七本の金冠が入念に出来て居たが、一本抜齒があつた。此の齒——特に七本の金冠——が手懸りになる。

四

被害者は誰だか、全くわからなかつた。

警察では、まづ被害者の等身の半身像を作り上げた。醫師、彫刻師、畫家、モデル屋、呉服商、衣裳屋、いづれも其の道の達人の合作で、被害者の生人形を作つたのである。日本流で云へば、安本龜八式だが、銀座あたりの百貨店のシヨールウインドウによく出て居る精巧な蠟人形——あれである、それへ専門家の智能を絞つて、被害者の生存當時の色と同じ色と推測せられる皮膚の色を加

へ、殺された時に着て居たのと同じやうな着物（例の揮發油で焼かれた着物と同じやうな着物）を着せて、此の生人形を撮影して、諸方へ配布した。

又、齒型にも十分の特徴があることだから、それを精細に撮影して、齒科醫の専門雑誌に掲げた。

併し、被害者は誰だか、依然としてわからない。

五

斯くして、五里霧中に在ること、凡そ一年に亙つたが、維納の警察官憲は少しも捜査の手を緩めなかつた。

或日、警官が一つの端緒を得た。事の起りは、例の齒型である。

或齒科醫に、被害者の齒型の寫眞を見せたところが、（此の齒科醫は、専門雑誌に掲げられた寫眞を見て居なかつたのである。齒科醫の専門雑誌に、被害者の齒型の寫眞を掲げて、齒科醫の方面から、被害者の手蔓を得やうとしたのは、決して有効な方法ではなかつたと、後に、當該係官は云つて云る。つまり、専

門雜誌を購讀して居る齒科醫は多いが、新様な寫眞に注意する齒科醫は極めて稀で、此の齒科醫も、例の専門雜誌は見て居たのだが、問題の齒型の寫眞は矢張御多分に洩れないで、看過して居たのだつた。どうも、之れは儘に自分の手入れしたものだと言つて、診療簿を繰つて見ると、成程、びつたりと、齒型の寫眞と診療簿の記載とが符合した。患者の氏名はアンドレアス・フェルナー妻とある。此のフェルナー夫人こそ、問題の被害美人に相違ないのである。念の爲に、齒科醫を警察本部へ連れて来て、例の生人形を見せた（生き人形は警察本部に飾つてある）。齒科醫は記憶を喚起して、此の婦人に相違ないと、確言した。

六

次から次へ、七本も金冠を入れたのだから、此の齒醫者にとつては、フェルナー夫人は大切な得意先だつた。生人形を見て、記憶を喚起しつゝ、齒醫者は次のやうな陳述をした。

フェルナー夫人はダンサーで、元は寄席の踊り子だつたが、後には芝居へ出て居たやうである。職業柄でもあらうが、派手な女で、大分贅澤をして居るやうだつた。亭主はルーマニヤ人で、芝居者だと云ふことである。俳優だが、どうだか、それは自分は知らないけれども、兎に角、芝居の関係者だが、夫婦仲は決して圓滿ではなく、フェルナー夫人の言つたところを総合すると、二人の日常は、寧ろ夫婦喧嘩が大部分を占めて居たらしいやうである。何でも、亭主が細君を殺すと云つて、おどかすので、それが怖ろしくてたまらないと、フェルナー夫人は時々こぼして居た。そのうちに、二人は離婚の手續をした。離婚になつてからも、フェルナー夫人は治療を受けに来たが、矢張贅澤な暮らしをして居るやうだつた。併し、それから、フェルナー夫人が何をして居たか、どこに住んで居たか、此の七本目の金冠が出来た後は、さつぱり自分のところへは、顔を見せない――

此の陳述が、捜査に光明を與へたことは、云ふまでもない。又維納の警察本部はフェルナー夫人の前夫アンドレアスを嫌疑者と目したことも、勿論である。

七

アンドレアスは芝居道の渡り者だつた。一定の劇場には従属しないで、甲の劇團から乙の劇團へ、移り代ることを、常として居たのみならず、重に旅興行の劇團にくつ附いて居たから、其の所在をつき止めるのにも、相當の苦勞はあつた。併し、やつとのことで、伊太利のトリエストで逮捕して、維納へ引致した。

早速、例の生人形を見せると、之れは慥に自分の先妻エルザ——之れが被害者の名である——に相違ない、此の生人形は實によく出来上つて居る、全くの生き寫しである、併し、此の着物には見覚えがない、と云つた。

八

アンドレアスの陳述は次の通りである。

「エルザと私とがよく喧嘩をしたことは、事實です。そして、私がエルザを殺

すと云つておどかしたことも事實です。左様ですね、殺すと云つて、おどかしたことは、三度や四度ぢやありませんでした。併し、私は殺す考はなかつたのです。喧嘩の基は、お恥づかしい次第ですが、大抵嫉妬です。エルザはひどい浮氣者で、いろんな男と、次から次へ、關係が出来るのです。まるで亭主たる私を念頭に置いて居ないやうな始末で、あまり不品行がひどいものですから、つい叱りもします。併し、叱つても、云ふことを聞くやうな女ぢやありませんから、已むを得ず、殺すと云つておどかしたやうな次第で、はい、殺す考は毛頭もなかつたのです——

「併し、エルザの身持ちはどうしても直りませんでした。そこで、私も思ひ切つて、離婚をすることにしたのですが、エルザの方ぢや、喜んで居ました。馬鹿馬鹿しいお話で、私は徹頭徹尾踏み付けられて居たのです。エルザはさつさと飛び出して、それつきり、晋沙汰もありません。どこにどうして居るか、それ以來、一度も逢つたことはないのです——

「何ですつて？ 一九二八年の七月十七日（エルザの殺された日）に、私がど

ここに居たかと、お訊ねになるのですか。私は旅興行の芝居者です。年が年中の旅鳥で、殊に一年も前のことでも、どこにどうして居たか、勿論記憶がありません——

「困りましたなあ、いくらお訊ねになりましたも、一年以上も前のことですからね、こんなことになるのと知つたら、日記でもつけて置くと宜かつたのですが、困りましたなあ、實に——

「いや、わかりました、有り難い、記憶を喚起しました。七月十七日！ そうです、其の丁度当日に、私はトリエストの郊外で、自動車を操縦して居たのですが、事故が起つて、自動車の外へ、私はほうり出されたのです、自動車はめちゃめちゃになりましたが、私は少々の怪我で助かりました。それでも、一兩日は寝て居ました。」

此の陳述が本當だとすると、アンドレアスの無罪たることは明白である。トリエストは伊太利の北端アドリアティック海に臨んだ港で、維納とは三百哩以上も離れて居る。トリエストで怪我をして寝て居た者が、其の日に、維納で人

殺しをする筈のないのは、わかりきつたことである。

維納の警察本部は早速トリエストの官憲に調査を囑託した。調査の結果は、アンドレアスの陳述の通だつた。尤も、日は一日違つて居た。七月十六日（エルの殺された前日）に、アンドレアスが自動車の事故で負傷して、十七日には静養の爲に、終日寝て居たことが判明した。

此の男こそは眞犯人だと思つたのだが、潔白は完全に證明せられたから、即座にアンドレアスを放免した。

九

維納の警察本部はがつかりしたが、併し、捜査は一層の緊張を示した。

被害美人エルの前夫アンドレアスの陳述に依つて、エルザは離婚前は重にトリエストに住んで居たことが判明した。即ち、嘗てトリエストに住んで居た女が、維納で殺された。維納に於ける被害者の行動は、一齒科醫を度々訪れて、入念な金冠を作つて貰つたと云ふ外には、全く不明である。

トリエストから維納へ！被害美人エルザの身邊を明かにするが爲には、此のトリエストから維納への移轉の經過を辿る必要がある。筆者は嘗て此の話の筋とは逆に、維納からトリエストを通つて、伊太利へ南下したことがあるが、維納を夜更頃に出て、急行の汽車で、トリエストに着いたのは、翌日の正午頃だつたと記憶する。兎に角十數時間の行程である。

此の十數時間の聯絡は、エルザの死因の説明には、極めて重要なことである。エルザは離婚の前後に互つて、屢々維納の齒醫者を訪れたことがある。尤も、齒醫者で治療を受けたこと以外には、維納に於けるエルザの行動は判明して居ないが、齒の治療の爲にのみ、維納へ來たのだとは思はれない。然らば、何の爲に、維納へ來たのであるか。

トリエストから維納へ！どうしても、これははつきりさせなければならぬのである。

一〇

一九二八年の夏、維納の動物園のなかで、銃殺せられた上に、揮發油をぶつけて、屍體をめちゃ／＼に焼かれて居た怪事件に付ては、維納警察の苦心に依つて、被害者はエルザと云ふ踊り子で、浮氣で派手な當世美人、嘗てトリエストに居た者だと云ふことだけが、判明した。そこで、トリエストに居た女が、どうして、誰に手頼つて、維納へ來たか。其の捜査の爲に、維納警察は第二次の活動に移つたのである。

一一

エルザの殺されたのは、七月の十七日だが、前月の月末には、まだトリエストに居たらしい證據があつた。そこで、七月の一日から十六日までの間に、トリエストの郵便局で扱つた一切の電報の頼信紙を調べてみた。

幾千通の頼信紙のなかに、エルザと云ふのが、一つあつた。
イマタツ エルザ ドナウ

と書いて、宛名は維納の何區何町何番地、グスターフ・パウエルとある。エ

ルザと云ふのは、お花、お雪と云つたやうに、ざらにある平凡な女名前である。しかも、ドナウと云ふのは、被害者エルザの姓ではない。エルザ・ドナウと云ふ此の電報の發信人が、被害者エルザだと云ふことは、到底即断し難いところではあるが、第六感とでも云ふのか、係官の顔は遽に緊張した。

一一一

一片の頼信紙が手懸りになつて、維納警察はグスターフ・パウエルを嫌疑者——少くとも重要な関係者として、其の身邊に捜査の手を進めて行つた。グスターフ・パウエルは維納で名高い萬年筆屋で、資産も十分にあつて、相當に顔の賣れた男だつたが、獨身で、其の素行にはいかゞはしい點が尠くなかつた、餘りに多くの婦人と、餘りに親しい交際を續けて居たのである。

一一三

パウエルは商用——婦人關係の要件も兼ねて——伯林に滞在中だつたが、維

納から警官を急派して、そこで逮捕して、同所の監獄へ收容した。勿論未決囚としてである。

パウエルは極力犯行を否認したのみならず、エルザと云ふ女は全然知らない、嘯いて居た。

一方で、パウエルの維納の居宅を捜査したが、驚いたのは、婦人關係の書類の多いことで、日記帳や備忘録は、いろんな女の名前で一杯になつて居たし、女文字の艶書、逢曳の約束手紙と云つたやうなものが、次から次へと顯れて來た。成程聞きしに勝る凄腕である。好奇心も手傳つて、係官は之等の書類を丹念に読んで見たが、エルザの名前だけは、見附からなかつた。

併し、パウエルの給仕を警察へ呼び付けて、例の塑像——エルザの生き人形——を見せると、遂に此の女には見覚えがある、主人の命令に依つて、停車場へ迎へに行つた。即ち、此の女がトリエストから來るのを、迎へに行つたことがある、と確言した。

此の供述を齎して、パウエルを詰問すると、流石に彼れも多少は閉口したと

見えて、成程、私はエルザを知つて居る、二人は嘗て關係があつたけれども、雙方で嫌氣がさして来て、詳しく云へば、私に新しい情婦が出来ると共に、彼女も別に情夫を拵へて、お互に綺麗に別れることにした。別れたのは、朝だつたが、彼女は其の日の午後、動物園で、新しい情夫と會ふことになつて居ると、さも得意らしく語つて居た、と陳述した。

「動物園へ行つたのは、君だらう？」

「いゝえ、どう致しまして、私はまだ一度も動物園へ行つたことがありませんよ。」

話題が動物園に觸れると、彼れは斷乎として、否認するのであつた。

一四

パウエルの居宅で押収した小型の備忘録は、婦人と逢曳の約束——場所や時刻——を記載したものであるが、其のうちの一行は、丁寧にインキで塗り潰してあつた。眞つ黒に塗り潰してあるから、下に何と書いてあつたか、それは全

然不明であつた。併し、それを専門家の手に懸けて、巧に、新しいインキだけ——塗り潰したインキだけ——を拭ひ去ると、拭ひ去られたインキの下から、鮮やかに、「動物園」と云ふ文字が顯れて來た。

一五

パウエルの犯行に付て、證據が着々乎と出て來たが、今一と息と云ふところで、それ以上の捜査は困難に陥つた。何しろ、二人きりの場所で行はれた犯罪だから、犯罪前の經過的事情に付ては、餘程濃厚な情況證據はあるのだが、惜しいかな、肝心の確な證據は顯れて來ない——そこへ、面白い變化が突發した。

パウエルは伯林の監獄に未決囚として、收容せられて居たが、隣の監房に、一人の既決囚人が居た。此の既決囚人とパウエルとはいつの間にか餘程親しくなつて居たが、看守はそれに氣が附かなかつた。

其の既決囚人の刑期が終つて、出獄する際に、パウエルはひそかに二通の手

紙を渡して、之れを郵便で出して呉れと頼んだ。勿論たんまりとしたお禮の約束はあつたのである。斯様な秘密通信は嚴禁せられて居るのだが、巧に官憲の目を掠めて、手紙の授受は、無事に済んだのであつた。

一六

釋放せられた既決囚人は、パウエルに頼まれた二通の手紙を投函した。

二通の手紙は維納に居るパウエルの友人と情婦とに宛てられたもので、一九二八年の七月十七日、即ち本件の犯行の當日、自分は決して動物園へは行かなかつたと云ふこと、現に明かにどこそこに居たと云ふことの偽證を、依頼した手紙だつたが、其の二通の手紙は、宛名の場所へは着かないで、眞つ直に、伯林の郵便局から、維納の警察本署へ届けられた。

實は、看守はパウエルと既決囚人との交渉を熟知して居たのだが、それを逆利用する爲に、わざと、知らない風を装つて、うまく一杯はめたのであつた。謀る謀ると思ひの外、却て、巧に謀られて、パウエルは自己の犯行の確證を自

ら警察へ提供してしまつたのである。

探偵史最初の電報の話

一

電報が犯人逮捕の爲に、役立つたのは、左程古いことではない。こゝに書く物語は、英國に於て、電報が探偵の功を奏した最初の事件で、一八四五年、しかも正月元日のことである。序ながら、無線電信が探偵史上の大立物になつた第一の事件は、例のドクトル・クリツペンの逮捕で、それは、此の物語の後、半世紀餘のことである。

二

倫敦のパディントンと云ふと、倫敦の華美の中心、ウエスト・エンドに近い一區劃で、稍々裏町の觀はあるが、西部方面への汽車の出發點で、勿論、人の

出入の多い場所である。

此の停車場へ、こゝから約二十哩西のスラウの停車場から、一八四五年正月元日の夜、一通の電報が着いた。其の文面は次の通りである。

『そうと・ひるニ於テ殺人事件アリ、嫌疑者ハ午後七時四十二分すらう發倫敦ニ向ヒタリ、一等切符所持、くえーカー式服装、茶褐色ノ極メテ長キ外套、一等第二列車ノ最後ノ室ニ在リ。』

之れが、探偵史上に特筆せらるべき電報である。

電報は直に警察署へ送られた。

署長の指令に依つて、氣の利いた刑事が驛前の乗合馬車の車掌に早變りした。クエーカー式服装と云ふのは、クエーカー宗徒が當時着用して居た特異な衣裳で、勿論一と目でそれがわかる、殊に、汽車の室まで明白になつて居るのだから、間違ひはない。

問題の男は果して、乗合馬車に乗つた。車掌は變装の刑事である。

問題の男はジョン・トウエルと云ふ。中年を超えた頑丈な男である。トウエ

ルは乗合馬車でバンクまでの切符を買った。バンクと云ふのは、英蘭銀行の前で、バディントンの驛前から、三哩半はしつかりある、市内の乗合馬車としては、長い道中である。此の長い道中の間、變装刑事の車掌がトウエルの一舉一動を注視して居たことは、勿論である。

トウエルの方では、まさか電報で、自分の倫敦へ來ることが、豫告せられて居ると思はない。況して、水も洩らさぬ細緻な計劃の下に、網を張つて、待つて居ることには、氣の附く筈もない。しかも、自分の乗つた乗合馬車の車掌が、自分を附け覗つて居る刑事巡査だと云ふことに至つては、固より想像も及ばなかつたのであつた。電信機關がバディントンからスラウまで設けられたのは、つい近頃のことである。其の最近の施設が、犯人捜査にまで利用せられると云ふことは、流石のトウエルも、思ひ浮ばなかつたところである。

三

トウエルの寓居は倫敦の市内に在つた。そこまで、刑事は尾行して來たので、

トウエルの寓居は直に官憲に嗅ぎ附かれてしまつたのである。併し、尾行の刑事はトウエルの寓居を嗅ぎ附けたゞけで、其の儘本署へ歸つた。

翌朝、刑事部長がトウエルを訪ねた。例の刑事も同行で、二人共、平服である。

「あなたはトウエルさんでしたかね。」

「はい。」と何氣なく、答へた。

「あなたは昨日スラウに居ましたね？」

此の質問で、トウエルは吃驚した。萬事休すと思つたが、此のトウエルは、たいか者である、後に書くが、素性の悪い男である。クエーカー宗徒らしく見せては居るが、又、嘗ては、一時クエーカー宗に歸依して居たこともあつたが、此の清嚴な宗派の戒行を持續して行くやうな男ではない、今では、世間を欺く手段として、好んで、クエーカー式の服装を着用して居るだけである、そこで、トウエルは勿論全部を否認した。自分は昨日は終日終夜、倫敦に居た、と頑張つた。

事件は斯うである。

スラウのソート・ヒルに、ミセス・ハートと云ふ可愛らしい二十四五の女が住んで居た。此のミセス・ハートが正月元日の午後五時頃に、其の住居のなかで、ひどく苦しんで、唸つて居た。そこで、隣家の細君が様子を見に行くと、丁度、トウエルがミセス・ハートの家から出て來るところだつた。隣家の妻君はトウエルの名前は知らないけれども、此の男がよくミセス・ハートを訪ねて來ることは知つて居る。さて、隣家の細君がミセス・ハートの部屋へ入つて見ると、ミセス・ハートは床の上に倒れて、大變に苦しんで居る。物を言ふことすら出來ない状態だつた。醫師を迎へたが、まに合はないで、悶死した。

此のミセス・ハートと云ふのは、實は偽名で、セラ―・ハドラーと云ふのが、其の本名である。嘗て、トウエルが女中として使つて居たのだが、丁度其の頃、トウエルの妻が病氣で、しかも間もなく死んでしまつた。セラ―は美しい女だつた。此の美しいセラ―を、トウエルは自分の者にした。併し、セラ―を本妻にする氣はなかつた。セラ―はおとなしい、何事も主人本位、主人に身命の一

切を捧げて、それで満足して居ると云つたやうな女で、優しい、内氣な性質だつた。妾たることに甘んじて、トウエルを大切にして居た。

トウエルはセラ―を妾として、倫敦の市内に圍つて置いたが、それでは人目に附くので、郊外のスラウに、家を持たせて置いたのである。

セラ―は子供を二人生んだ。勿論、トウエルの子である。

こんな可愛らしい優しいセラ―、自分の妾たることに甘んじて、どこまでも自分を大切に居るセラ―、しかも、自分の子を二人までも生んで居るのである。此のセラ―がトウエルにとつて、少々うるさくなつて來た。セラ―の心は變らないけれども、トウエルがセラ―を嫌ひ始めたのである。『目に附いた女近頃鼻に付き』と云つた工合で、浮氣は永くは續かないものである。之れは、どこでも、同じことゝ見える。

何故にトウエルがセラ―を嫌ひ始めたか。それは、單純に浮氣が醒めたと云ふだけではない。トウエルは近く後妻を持つことになつて居た。併し、それに、セラ―は賛成して居るのである、セラ―は妾たることを以て満足して居る、

若い綺麗な身空を、日蔭者として、中年を超えたトウエルに捧げてしまつて居るのであつて、トウエルが後妻を迎へることに、毛頭も苦情はないのだが、セラールと云ふ妻のあることは、後妻には秘密である、此の事は、後妻にはどこまでも隠しおほせなければならぬ、これが一寸面倒なことである。そして又、セラールを妾として圍つて置くには、其の手當が必要である、セラールは慎ましい女で、其の手當も極めて少額だつたが、いくら少額でも、手當を呉れてやることが、惜しくなつて來た。きたない男ではある。トウエルの兇行の主要な原因は、此の手當の問題だつたのである。

四

こゝで、トウエルの素性を一瞥する。

トウエルは紙幣偽造の罪で、濠洲へ流刑に處せられて居た男である。當時、紙幣を偽造して行使すれば、死刑になつたが、偽造だけだと、罪一等を減せられた。トウエルは偽造もし、行使もしたのだが、偽造の點だけ起訴になつて、

従つて、死刑は免れたのである。其の頃は死刑に當る罪の數が多かつた。そこで、多くの事件は、實際の罪よりも軽い罪として、起訴せられ、審判せられた。所謂英國式とでも云ふのだらう。外の話だが、五シリング（二圓五十錢）以上の物件の盜罪が死刑になつた時代がある。かゝる時代に於ては、被害物件が相當高價なものであつても、大抵は二圓五十錢以下と判定して、犯人の首は縮めなかつた。トウエルの偽造に付ても、此の筆法で、本來ならば、死刑になるところを、流刑の寛典に浴したのであつた。

トウエルは財慾の強い男で、同時に、理財の道に長けて居た。若い頃に、生藥屋に雇はれて居たので、藥劑の方面には多少の知識があつた、それを、新開地の濠洲で巧に利用した。新開地で最も必要なのは、又、最も困るのは、醫療の施設である。トウエルの藥劑店はとん／＼拍子に成功して、シドニー屈指の店になつた。

トウエルは藥劑店で儲けたのみならず、儲けた金を地所に投資して、之れが又大變に當つた。

それに又、トウエルは鯨骨で雑貨を作ることを發案した。安い鯨骨で、櫛や化粧箱を拵へるのである。これも大成功で、トウエルは容易に巨萬の財産を作り上げた。藥劑店を賣つた時には、店と商品とで十四萬圓になつたと云ふことである。何のことはない、トウエルは濠洲へ金を儲けに行つたやうなものである。

猗頓の言を藏して、彼れは刑期満つると共に、凱旋將軍の如く、倫敦へ歸つて來た。

倫敦へ歸つてからも、トウエルは盛に利殖の方面に手を出したが、さすがに倫敦は新開地の濠洲とは工合が違つた。濠洲で成功したトウエルも、倫敦では失敗を重ねた。失敗するに連れて、彼れは矢鱈に焦り出したが、焦れば焦るほど、損をするもので、慾心が人一倍強いだけに、其の損失も大きかつた。

此の焦躁の間に於て、トウエルは妻を喪ひ、女中のセラ―を妾にしたのである。セラ―がトウエルに對して、献身的であつたことは、前に書いた。其のセラ―にも厭きて來て、それに少額の手當を呉れてやるのが、惜しくなつたので、

犯罪の萌芽が再びトウエルの血管に湧いて來たのである。

五

トウエルは可憐なセラ―を殺すことを決意した。手段はお手の物の毒藥、彼れの選んだのは、青酸であつた。

正月の元日に、訪ねて行つて、二人で一緒に、黒麥酒を飲んだ。其の時、巧にセラ―の杯に、青酸を投じたのである。

さすがに、藥劑店で儲けた男だけあつて、藥の分量に間違ひはなかつた。青酸に依る毒殺は、直に功を奏して、セラ―は苦悶し始めた。

藥はよく利いたのであつた。否、寧ろ、利き過ぎたのであつた。餘りに早く利いたものだから、トウエルは逃げる機會を失つた。即ち、トウエルのまだ居る間に、セラ―が苦悶しはじめた。何しろ、吝つたれた阿爺の圍つて居る妾の家である、小さくつて、隣が近い。隣家の人達に氣附かれては大變だと思つて、早速飛び出して來たのだが、時既に遅く、隣家の細君に自分の姿を見られたの

であつた。

併し、兎に角、スラウからバディントンへ、バディントンから自分の寓居へ、うまく逃げおぼせたと思つて居た。近頃出来た電信機械が自分をふん縛る役目になつたことには、勿論、思ひも及ばなかつたのである。

法廷で、彼れの陳述するところは、自分が嘗てセラ―を女中に使つたことある、セラ―は女中としては、正直でもあり、勤勉でもあつた、然るに、スラウに移つてから、自分に度々金の無心を云つて来る、まるで性根が變つたやうだつた、問題の日に自分に訪ねて行つたが、死に度いくと云つて居た、それは彼女の近頃の口癖で、自分は冗談としか思つて居なかつた、其の日も死に度いくと云つて、何か粉薬のやうなものを、黒麥酒のなかに入れて飲んで居た、勿論それは狂言だと、自分は思つて居た、砂糖か鹽かと、自分は思つて居たのである、そこで、そんなことには氣に留めないで、自分はそこを辭し去つた、と云ふのであつた。

白々しい辯解で、眞つ赤な偽だが、死人に口なし、犯行はトウエルとセラ―

とたつた二人居る所で起つたので、トウエルに對する斷罪の直接の證據は乏しかつた。トウエルとしては、此の辯解が有力だと信じて居たらしいが、如何にせむ、情況證據は甚しくトウエルに不利だつた。セラ―の過去は、調べれば調べるほど、可憐で、可哀想である。人々のセラ―に對する同情が、加はれば加はるほど、トウエルに對する憎悪が、募つて行くのであつた。

のみならず、去年の九月に、一度、トウエルがセラ―を毒殺しようとして、未遂に終つたことも、明白になつた。

セラ―が殺された翌日、三人の醫師が屍體検査に當つたのだが、青酸が死因たることに、三人の意見が一致した。尤も、これには、實は非常な苦心があつたのだが、それはこゝには省略する。

セラ―死亡の當時、其の部屋のなかに、林檎が二十餘り轉つて居た。クリスマスに貰つたか、買ったか、兎に角、其の残りだつたが、此の林檎が法廷を一寸賑はせた。青酸は未熟な果物や其の種子のなかに存在することがある。そこで、辯護人のケリーは、セラ―が林檎を食つて、其の種子を誤つて飲み込んだ、

林檎の種子は往々にして相當分量の青酸を含んで居るから、それで、セラールが死んだのだと力説した。此のケリーは當時既に高名な法曹で、後に要職に就き、男爵に叙せられたが、氣の毒なことには、此の辯護以來、當分の間は、『林檎の種子のケリー』と云ふ綽名を頂戴した。

トウエルは有罪と判定せられ、其の年の三月十四日に死刑になつたが、死刑になる少し前に、全部を白状して、懺悔した。

其の頃は、英國の電信装置も舊式なもので、高い柱から柱へ、針金がぶら下つて居た。見物人は其の針金を指して、『あれでトウエルが首を締められたのだ。』と云つた。

紅 怨 悲 話

一

英國サセックス州の繪のやうな岡の上に、美しい住居を構へて、ジョージ・エリントンと云ふ辯護士が住んで居た。エリントンは辯護士の資格は持つて居たけれども、事務はまるで執らなかつた。執る必要がなかつたのである。親譲りの莫大な財産はひとりでに利息を生んで、遊んで居ても、収入は殖えて行く。金持ちの子弟にあり勝ちな、のん氣な樂天家で、面倒臭いことが大嫌ひだつたから、辯護士の職業は不向きでもあつたのである。斯様な譯で、彼れはたゞ形式上、幾つかの名譽職を兼ねて、面白可笑しく、其の日を送つて居た。

金と暇とがあり餘る、世にも結構な身分だが、斯様な結構な身分の者は、得て放埒に流れるもので、エリントンも其の點に於ては、御多分に洩れず、婦人

關係の方では、豪の者だつた。

二

エリントンの最初の細君は、綺麗で利巧な婦人だつたが、離婚訴訟を提起して、夫を棄て、しまつた。美しい細君に逃げられても、エリントンは一向痛痒を感じなかつた。前の細君よりも更に美しい瑞典生まれの麗人で、アン・ブロードリックと云ふ婦人が、まもなく、彼れの家庭に入つて來たからである。

アンは火の如き情熱と水の如き理智とを備へて居た。北方人種の特徴だが、白い膚は雪のやうに輝き、丈なす髪は淡い黄金の色を見せ、大きな瞳は深淵のやうな彩を帯びて居た。エリントンはアンと盛大な結婚の式を擧げたが、正規の手續は執らず、内縁の關係には過ぎなかつたけれども、相愛の二人は豪華な日常のうちに、甘い夢に耽りながら、三年の星霜を閲し去つた。

併し、勝手なものは、男ごころである。ましてや、凡そ金錢を以て購ひ得る總べての歡樂に付ては、其の望むところに、虧くることなきエリントンには、

一人の女に永遠の愛を捧げる信義の情操が缺けて居た。又もや、新しい美人がエリントンの心を支配するやうになつて、彼れは遂に此の婦人と正式に結婚した。アンは勿論これに大反對で、私はどこまでもあなたのものだと、縋り附いて、泣き叫んだけれども、エリントンの心は既にアンから離れて居た。尤も、金は十分にあるのだから、アンには、相當な生活費を送つてやることにして、ともかくにも、二人は手を切つたのであつた。

三

アンは不承々に、エリントンと別れたけれども、彼の女は衷心深くエリントンを戀ひ慕つて居るのである。日を経るに従つて、懐かしい過去の思ひ出は愈々やる瀬なく、遂に心を抑へ兼ねて、長文の手紙をエリントンに送つた。アンは情熱の女である。綿々の思を込め、呷々の怨を訴へて、血涙の文字を書き列ねたのであつた。

其の手紙には、次のやうな一節があつた。

『……今此の刹那に於て、たゞ偏に御願申上候は、一度お目もじの儀御許し破下度き事にて候、それも二度とは申すまじく、最後のお別れに、今一度しみじみと御話承り度き事にて候、凡そ此の世の男の情に縋りたる優しく憐れなる女ごゝろの、其の最も優しく最も憐れなる此の心を、お汲みなされ候はゞ、嘗ては廣き世に唯一人と只管愛撫し給はりし此の妾を、御想ひ起し下され候はゞ、此の切なる願は、必や御聞入れ被下候事と存上候……いかなる遠き極みにても、あなた様の御許には必縋り行くべき妾に候、あはれ、たゞ一と目の御恵みを賜はれかし、棄てられし女の思は、狂ふ嵐、閃く稻妻よりも恐ろしきものと思召し被下度……』

併し、新婚の夢仍ほ覺めやらぬエリントンには、此の手紙も一顧の價値がなかつた。アンは重ねて、更に哀切な手紙を送つた。それにも返事は來なかつた。

四

情熱の女、アンは決然として、みづからエリントンを訪ねた。

エリントン夫人が出て來て、エリントンは不在だと云つたが、それを信用するやうなアンではない、三年の間住み馴れた家である、もとより勝手はよく知つて居る、つか／＼と、アンはエリントンの居間へ突入した。

果して、エリントンは居間に居た。戀しい男、恨めしい男、其の當の本人エリントンは、アンの前に立つて居た。

一と目見て、アンはかつとなつた。怨みの言葉も述べ敢えず、アンは拳銃を、エリントンに向けて、發射した。

エリントンは靜かに立つて居た、黙つて、立つて居た。白蠟の如く、血の氣の失せた顔は、昔の哲人の塑像のやうだつた。エリントンは黙つては居たが、大きな眼を開いて、優しく、懐かしげに、例へば、兄が妹を見るやうな、おだやかなまなざしを以て、しげ／＼と、アンを見つめて居た。

其の優しい眼で、見つめられて、アンは其のまゝ、エリントンの脚下にひれ伏した。『許して下さい、私はあなたを殺さうとしました、悪うございました、さあ、私を警察へお渡し下さいまし。』悔悟の涙に咽びながら、アンは斯く叫ん

だ。

エリントンには静かに云つた。「お前は私をやつつけた、併し、私はお前に怨はない、お前を罰して貰ひ度くはない、私はもう駄目だ、弾丸は私の身體を貫通したのだ、たゞ、私には、お前の心がわからないのだ、成程、私はお前と別れた、併し、私として出来るだけの事はしてあるつもりだ、なぜ、私を殺す氣になつたのか、わからないのは、女の心だ。」

静かに、斯く云つて、ばたりと、エリントンは倒れた。彼れが最後の息を引き取つたのは、それから一時間後のことだつた。

五

法廷で、アンは素直に白状した。青白い頸を垂れて、懺悔の涙滂沱たるアン
の姿は、滿廷の人の哀愁を唆つた。

辯護人は、アンは兇行當時、心神喪失の状態に在つたものだから、アンに罪
責はない、と力説した。

判事の説示は、辯護人の無罪論を是認するやうに、聽けば聽かれる——寧ろ、
積極的に深くそれに同意するやうな調子だつた。

陪審員は合議時刻にして、「無罪」と答申し、判事はそれに基いて、アンを釋
放した。

少しく前の舊聞だが、英國法廷の實話である。

紅炎秘話

一

米國テキサス州のアマリロと云ふ町は、人口一萬五六千の小都會だが、鐵道幹線の交叉點でもあり、山岳地方と平原地方との折衝地でもあつて、相當繁華な町である。

此の町にベインといふ辯護士が居た。此の町では、第一流の名望家で、事件も多く、従つて収入も殖えるばかり、細君はジンといふ、これも社交界で評判が好い、二人の間には十歳になる娘と九歳の男子とがある。家庭は圓滿、職務は多忙、収入は澤山と來て居るのだから、ベイン一家の幸福は、誰にも羨まれたものであつた。

併し、悲劇の魔の手は、此の幸福な家庭へも襲つて來た。其の話をこゝに書

く。

二

一九三〇年の六月下旬の或朝、ベイン一家の者、即ちベイン夫婦と子供二人とが一緒に家を出た。ベインは事務所へ、ベイン夫人と子供二人とは町へ買物に、出たのであるが、ベイン夫人と息子とは自家用の自動車で、ベイン夫人がそれを操縦して居る。ベインは娘を伴つて徒歩である。娘は一寸事務所へ立ち寄つて、後からベイン夫人の買物先へ追つかけて行く豫定なので。

ベイン夫人は息子を乗せて、自動車を操縦して居たのであるが、家を出てから十五六分たつたかたゝないうちに、俄然、自動車が爆發して、ベイン夫人は即死し、息子は瀕死の重傷を負うた。

急報に因つて、ベインは現場に駆け付けたが、意外の出來事に吃驚仰天してたゞうろ／＼して居るばかりだつた。

警察官の綿密な調査に依つて、時間装置の爆薬が自動車の中に置いてあつて

それが爆破の原因だと云ふ事が、判明した。即ち、誰か、劇烈な爆薬をこつそりと自動車の中に入れて置いて、一定の時間がたつと、それが發火するやうに、仕掛けて置いたのだと云ふことが、確實になつた。

事件は重大な殺人である。併し、さて、犯人は誰であるか。

三

警察では百方捜査の手を擴げたけれども、まるで犯人の見當が附かなかつた。ペインはこれに憤慨して、一萬圓の懸賞金を約束した。

米國にはよくある例だが、新聞社が刑事事件の捜査に乗り出すことがある。場合に依つては、それが邪魔になることも尠くはないが、時には、それが奇功を奏することもある。此の時には、地方新聞の『グローブ・ニュース』と云ふのが、犯人捜査に熱中したが、何しろ小新聞のことだから、左様なことには不案内な者ばかりなので、『カンサス・シティー・スター』紙の記者マクドーナルドに助太刀を頼んだ。

マクドーナルドは斯の道にかけては、一とかどの老練家だつた。彼れはまづ第一着手として、ペインを訪ねて、ペインの事務所に現在働いて居るタイピスト、又嘗て働いて居たタイピストに付て、御説明を願ひたい、と云ひ出した。『左様ですね、今使つて居るのは、オシーと云ふ女で、これは現に事務所に居りますから、直接お調べ下さい、妻の死んだ時には、メーブルと云ふ女を使つて居ました、これは今年十九になりますが、なか／＼美人でした、才氣煥發の方でした、その前に使つて居たのは、ヴェローナと云ふ女で、これは今年二十五になります、一向平凡な女で、容貌もまづ中等以下で……』

ペインの説明を聽いて居たマクドーナルドは、こゝで、『宜しい、わかりました、何とか調べ上げて見ませう。』と云つた。

四

現在働いて居るタイピストには、別に不審な處はなかつた。

ペインは前任の二人のタイピストに就て、メーブルを特に才智の鋭い美人だ

と云ひ、ヴェローナを一向つまらない女だと言つた。そして此の對照を殊に語氣強く説明したものだから、炯眼の探偵道の達人、マクドーナルドはそこに何か仔細があると感附いた。マクドーナルドは早速メーブルを訪ねたが、ペインが力強く説明したほどの美人ではない、次に、ヴェローナを訪ねたが、これは却て相當はつきりした容貌で、どちらかと云ふと、美人の部類に屬するのみならず、無限の魅力が此の女の容姿に潜んで居るのを、看過することが出来なかつた。こいつは怪しいと睨んで、訊問の十字砲火を浴せかけたが、最初は知らぬ存ぜぬと言ひ張つて居たものゝ、流石は女である、巧妙な訊問に引つかゝつて、ヴェローナは遂に一切を自白した。ヴェローナとペインとは戀に陥つて、固く夫婦の約束をした。ペインはいく度も、自分はきつと今の女房を離別する、いかなる犠牲を拂つても、二人は正式に結婚しやうと、誓つて居た、現に、細君の横死の後、ペインは毎日訪ねて来て、二人は最早事實上の夫婦になつて居る、と白状してしまつた。

五

最初はペインも自白しなかつたが、罪狀明瞭だと考へて、官憲は彼れを逮捕した。其の後彼れは決然として、一切を白状した。今回の惨事は勿論彼れの所爲であるのみならず、再三それまでも妻を殺さうとして、未遂に終つたことがある、動機はヴェローナと正式に夫婦になりたいためだと、委曲を盡して白状した。そして、其の數日の後、ペインは未決監で自殺した。それは豫めボケツトに、ひそかに、少量の爆薬を入れて置いて、それに點火して、自ら爆死したのであつたが、此の爆薬を携帯して居たことに氣の附かなかつたのは、勿論監獄吏員の不注意であつた。

六

最後に、哀れな挿話がある。

ペインは例の「ホーム・スキー・ホーム」の歌の作者の後裔だと、自ら誇

つて居た。死後、彼れの遺言書が発見せられた。それには、たゞ一句、自分の葬式には、『ホーム・スキート・ホーム』の歌を皆で唱つてくれ、とあつた。

いかに重大犯人とは云へ、優しい遺言である。彼れの葬式の當日、彼れの友人は遺骸を繞つて、彼れの祖先の名作、『ホーム・スキート・ホーム』の歌を唱つた。

女ごゝろ

—

ガブリエルは仕合せな娘だつた。パリで名高い大きな雜貨商の一人娘で、やがては、巨萬の財産の持主になるのだが、女として、何よりもまづ仕合せなことには、彼の女は素晴らしい美人だつた。ラテン系に特有な漆黒の髪の毛はふさ／＼として、解けば、裾にも垂れるだらう、髪の毛が黒いから、白い顔は一としほ白く、しかも、大きな瞳は、曙の空のやうに、鮮やかな青色を見せてゐた。黒い髪で青い目の女は少いものである。其の少い類型に屬して、素晴らしく美しいのだから、ガブリエルは全く人の目に附く娘だつた。

大金持の一人娘で、人の目に附く美人だから、派手で、おきやんで、勝手者だつたが、それを知るや知らずや、求婚の數々は、日に殖え、月に増して、こ

の世の春を鍾めたやうに、カブリエルの將來は多幸多福なものと思はれた。

二

然るに、仕合せな娘も、妻としては、決して幸福ではなかつた。父の急逝と共に、カブリエルが店の支配人のマラーンと結婚すると云ふ噂が立つた時には、誰もあいた口が塞がらなかつた。支配人とは云ふものゝ、小僧上りの番頭で、教育のない下品な男である、これまで店の品物を大分くすねて居たと云ふ評判もある、それに年も餘ほど上だし、殊にあの薄穢い面相と輝くやうに美しい若いカブリエルとを對照すると、凡そ正反對の極致である。固より、何人もその噂を信じなかつた、誰しもそれを信じたくはなかつたのである。併し、まさかとは思つたものゝ、それが間もなく眞實となつて顯れた。カブリエルは年上で醜い番頭のマラーンと結婚したのであつた。

今は店の全權を掌握したマラーンは、遽に老獺の本性を發揮して、放恣、暴戾の限を盡し、殊に妻のカブリエルに對しては、鬼畜の如く、残忍だつた。

娘のころには、我儘者と云はれたカブリエルも、すべては運命だと諦めたものか、齒をくひしばつて、情ない忍従のうち、二人の子の母となつた。

三

併し、戀は曲者である。マラーンに極度に虐げられて居たカブリエルは、かつてマラーンの下に働いて居たルイと云ふ若い男と、道ならぬ道を歩むやうになつた。妻となり母となつたお染は、美青年の久松と狂はしい戀に落ちてしまつたのである。

カブリエルとルイとの仲は、日に月に、其の濃厚の度を加へた。逢曳の數も繁かつたので、うすくは夫のマラーンも氣附いて來た。其のやけ氣味も手傳つて、マラーンの放埒はまた一しほ激しくなつたので、遂には、店も人手に渡してしまひ、本通から裏町へ、裏町から場末へ、流れくつて、しかも、其の間に、詐欺の廉で、暫く監獄の厄介にもなつて居た。

本夫のマラーンが生活のどん底に喘いて居る間に、姦夫のルイはとんく拍

子に成功して、今では、大店の主人になつて居る。此の本夫と姦夫、昔は番頭と小僧、今は場末の陋居に其の日／＼のパンにすら困つて居る前科者と初夏のやうに景氣好く榮えて行く少壯實業家とが、或日、偶然に、競馬場で一緒になつて、一と口二た口、云ひ争つて居るうちに、喧嘩になつたが、落ち目に祟り目で、マラーンはルイのために、小つびどく引つばたかれた。

散々にぶんなぐられて、ひよろひよると、場末の家に辿り着いたが、妻のガブリエルに、いきなり抱き着いて、わつとばかりに、大聲を立て、泣き叫んだ。口惜しい、悲しい、癪にさはる、腹が立つ、千萬無量の思が、大粒の涙となつて、ぼた／＼と、流れ落ちた。

丁度、このころ、ガブリエルは、ルイが近く誰かと結婚すると云ふ風評を耳にして、さては自分も裏切られたかと、憤慨して居たので、夫婦はこゝに期せずして、報復のために、ルイを殺す決心をした。

報復は手つ取り早く實現せられた。郊外の明き家を逢曳の場所に指定して、ガブリエルがルイをおびき寄せて、そこで、マラーン、ガブリエル、マラーン

の弟、此の三人が、ルイをなぐり殺した。

四

『成るほど、私は長い間、ルイを愛して居りました、夫を忘れ、子を忘れて、ルイの愛に浸つて居りました、しかし、夢は覺めました、夫がルイにひどく打たれて、みぢめな姿で、歸つて来て、いきなり私に縋り附きました時に、その瞬間に、濟まなかつた、悪いことをして居た、と云ふことに、氣が附きました、そして、これからは、此の夫のために、身も心も、一切を捧げようと決心しました、ルイを殺したのも、夫のために、夫の讎を報いたのです……』

これが、法廷に於けるガブリエルの述懐である。

検事はガブリエルを目して、かつて見ざる兇暴の女として、死刑を求刑し、判事も審理中にしば／＼ガブリエルを痛罵したが、陪審員は減刑の推申をした。判決の結果は、マラーンは死刑（後に終身流刑に変更）、ガブリエルと他の共犯（マラーンの弟）とは終身懲役。

女は夜叉か、それとも、たゞずる／＼と男に引き摺られて行く弱いものか、それは知らず、女ごころの少くとも一例を示す右の物語は、第十九世紀末に於けるフランスの裁判實話である。

x

x

x

x

母 ごとろ

—

巴里の西南、ロアール河の畔、都を遠く離れた片田舎に、村の人々の尊敬を一身に鐘めた小學校の女先生で、ヴォロンさんと云ふ人が居た。

ヴォロン先生は親切で、熱心で、學問があつて、信心深い。二十三四の時に、夫に死別したが、其の頃は、花のやうに綺麗な女だつた、顔も姿も清く美しい女だつた、併し、此の美人の寡婦には、浮いた噂は全くなかつた、身を持つること極めて堅固で、尼僧のやうな戒行を守つて、専ら育英の道に勤しむこと二十五年、此の物語の當時は（今から數年前の事である）、四十八九歳になる。ヴォロン先生と云ふよりも、「女聖人」の尊稱に依つて、近郷近在に鳴り響いて居る。

ヴォロン先生の姑——ヴォロン先生の亡夫の實母——は、たつた一人で、近所に別居して居る。佛蘭西では珍しくないが、極端な節約家で、まづ吝嗇に近い、従つて、裕福である、金に不自由はないが、出費を嫌つて、下女も下男も置かない、老婦人の一人世帯である。此の姑に對して、ヴォロン先生は十分に孝養を盡して居る。自分の最愛の夫、此の世の縁は薄くつて、同棲僅に數年に過ぎなかつたけれども、千代かけての契と思へばこそ、あらゆる誘惑を却けて、先立つた人への誓を固く守つて來たのである。其の最愛の人の生みの親だから、ヴォロン先生は姑を大切に居たのであつて、之れが又、村の人々の尊敬の原因の一つだつた。

二

ヴォロン先生には、ロージャーと云ふ一人の息子がある。亡夫の忘れがたみである。ヴォロン先生に似て、くつきりと恰好のいゝ鼻、ぱつちりと涼しい眼、殊に花の苔のやうな可愛らしい唇を持つた綺麗な青年で、二十五になる。

此のロージャー青年は、顔や姿に、母の「女聖人」の面影を傳へて居るが、心はまるで正反對だつた。母のヴォロン先生が物事に熱心で、いつも周到な注意を怠らないのに反して、ロージャーは萬事が投遣りで、だらしがなくつて、勉強が大嫌ひだつた。しかも、此の母子の性格の最極端に違つて居るのは、異性に對する素行上の點であつて、母が寡居二十五年、持戒堅固な尼僧の如き清嚴な日常を送つて來たのに對して、息子のロージャーは二十になるかならない頃から、いつも忌まはしい浮名の主になつて居た。

學徳の譽の高いヴォロン先生も、ロージャーには、ほと／＼閉口して居た。村の人々もロージャーには愛憎を盡かしたが、あのやうな立派な先生に、どうして、あのやうな馬鹿息子が出來たのだらう、親が聖人で、子が外道だ、全く以て、ヴォロン先生はお氣の毒だと、ロージャーの取沙汰が悪くなればなる程村の人々のヴォロン先生に對する同情は、益々加はつて行くのであつた。

三

ヴォロン先生は「女聖人」だが、要するに、小學校の女教師である。其の收入は勿論少い。ヴォロン先生の姑、即ちロージャーの祖母は相當の金持だが、之れは前にも書いた通り、握り屋で、孫も可愛い、が、金の方が孫よりもまだ可愛い。されば、なまけ者のロージャーには、金の出處がない。之れには、ロージャーも弱つた。ヴォロン先生は既に閉口し切つて居る。そこで、ロージャーは巴里へ行かうと云ひ出した。ロージャーの考では、花の都には、なにか一攫千金の旨い仕事があるだらう、そして、華やかなシャンデリヤの下で、美しい女と芳しい酒の香に酔ふ——と云ふ位のことだつたが、母のヴォロン先生は、之れをロージャーの更生の好機だと考へた。そして、氣の毒にも、苦しい算段をして、旅費を調達して、ロージャーを巴里へ出立せしめた。

巴里で何をして居たか、それはわからないが、好運が巴里の町にもころがつて居なかつたことは、事實で、ロージャーは無一文で、ぼんやりと、故郷へ歸つて來た。

四

或夜、ロージャーは祖母の家へ、強盜に押入つた。祖母は吝嗇な金持で、たつた一人で暮して居る。そこへ金の無心に行つたのである。金の無心と云つたところで、深夜、戸を叩き破つて、しかも外に一人の共犯を誘つて、押入つたのだから、勿論強盜で、しかも、ロージャーは此の時祖母を締め殺したのである。祖母が聲を立てたので、兩手で祖母の頸を締めたのである。

ロージャーと其の共犯（見張番をして居たのである）とは、其の夜のうちに逮捕せられた。

五

ロージャーに對する罪名は強盜殺人、しかも尊屬殺である。尊屬殺は殺人のうちでも刑罪が最も重い。到底極刑を免れない事案である。

法廷の審理はすらくと進捗した。何しろ、一點の疑惑の餘地のない證據明

白な事件であり、しかも、實の祖母を締め殺した事實である。陪審員は既に尊屬殺の被告人ロージャーを極度に憎んで居たのである。

審理が終つて、陪審員が評議に移らうとした刹那、眞つ蒼な顔をして傍聴して居たヴォロン先生が、ふら／＼と立ち上つた。裁判長は『女聖人』の評判を知つて居た。そこで、同情に充ちた聲で、

『何かおつしやるのですか、寛大な處置を求めると云ふのですか、それとも、何か新しい證據でも……』

と尋ねた。

ヴォロン先生は弱々しいが、併しはつきりした口調で、

『いゝえ、私は……私は懺悔し度いのです。』

滿廷愕然として、愁に瘠せたヴォロン先生の寂しい立姿を凝視した。

殉教者のやうに氣高い態度で、ヴォロン先生は述べる――

『すべて倅が悪いのです、敢て私は嘆願は致しませぬ。併し、本件が尊屬殺だと云ふこと、倅が祖母を殺したと云ふことだけは間違ひでございませぬ。此の二

十五年の間、皆様は大變私をお褒め下さいました、貞女とか、節婦とか、有難い評判を、私は頂戴して居りました。それが、私には決して當らない勿體ない評判だつたのです。私は世間を欺いて居たのです。丁度今から滿二十五年前、私の夫がまだ生きて居ました時に、私は或男と不義の夢に耽つて居ました。私是不義の女だつたのです、其の不義の子が則ち此のロージャーで、被害者は決してロージャーの祖母ではないのです。此の祕密はロージャーと私とだけが知つて居るのであります、私には決して當らない勿體ない評判を維持させる爲に、ロージャーは絶対に此の祕密を口外しませんでした。此の不義の母に貞女節婦の名聲を撞にさせる爲に、流石のロージャーも之れだけは固く祕密を守つて居て呉れたのです。併し、私は敢てロージャーの爲ではなく、廣く世間にお詫びを申上げる爲に、こゝに一切を懺悔するのであります。』

六

陪審員が此の懺悔を信用したか否や、それはわからないが、ヴォロン先生の

苦衷は買つた。そして、事件を尊屬殺に非ざる強盜殺人と答申し、法廷は十四年の懲役刑を言渡した。

然るに、ロージャーの服役中に、嘗て彼れが巴里に滞在して居た當時、或老人を強盜の目的で殺害した事件（此の話の事件とは全く別な事件）が発覺し、其の事件に依つて、死刑を言渡された。

ヴォロン先生が二十五年の名聲を賭した苦衷も、遂に結局は水泡に歸したのであつた。

怪談 親殺し

一

これは怪談である、因果物語である。少し尾緒を附けると、丁度梅雨時である、じめ／＼と鬱陶しい、薄暗く物凄いな北張の種本になるかも知れないが、例によつて、事實の儘を、卒直に書く。尤も、大分古い話で、一六八七年の出来事である。

二

蘇格蘭の南部にアミスフィールドと云ふ小邑がある、そこに代々の名望家で、サー・ジェームス、スタンスフィールドと云ふ老人が居た。律氣な紳士で、財産も多く、人に敬はれ人に羨まれる身分だつたが、何の因果か、長男のフィリ

ツプは、なまけ者で、放蕩で、子供の時分から、随分念の入った亂暴者だつた。子供の時分からの癖がだん／＼悪くなつて、二十を越した頃には、一と廢の厄介者になつてしまつたから、父のサー・ジェームスも愛憎を盡かして、相続權の剝奪——日本流に云へば廢嫡——の手續を執つた。そこで、厄介者のフリッブは憤慨して、其の亂暴は益々募る。廢嫡にはなつたけれども、フリッブは時々父の家へ歸つて來て、事毎に當り散らす。サー・ジェームスの家は宏壯なものだつたが、いくら立派な住居でも、フリッブの歸つて居る間は、朝から晩まで、いやな思をさせられるのだから、サー・ジェームスにとつては、荆棘の床だつた。可哀想に、サー・ジェームスは、此の頃は毎日毎日泣いて暮らす外はなかつたのである。

三

一六八七年の十一月二十一日の晩、蘇格蘭の冬は一入寂しい、風の吹き荒ぶ夜、サー・ジェームスと牧師のベルとは、同じ村のマーと云ふ者の家で話し込

んで居た。サー・ジェームスは近頃フリッブの亂暴がひどいので、自分一人で居ては心細い——次男のジョンはまだ子供だし、召使は數人居るけれども、之等はとてもフリッブには齒が立たない——誰か然るべき人に泊つて貰はうと思つて、頼みに出たのだが、丁度マーの家で、ベル牧師と出逢つたのであつた。老人と牧師とは話がよく合ふ、まあ牧師さん、聽いて下さい、何の因果か、お恥づかしくつて、お話にもならぬやうな始末で、と云つたやうな工合で、サー・ジェームスが愚痴をこぼす、それを、ベルが持前の牧師口調で慰めて居る、そこへ、郷士のスパーウエーが來會はせたが、サー・ジェームスは此のスパーウエーに泊りに來て貰ひ度かつたのである、併し、スパーウエーには已むを得ない用事があつたので、ベル牧師が其の代りに泊ることにして、サー・ジェームスはベル牧師と自分の家に歸つた。スパーウエーは途中まで見送つたが、風の夜道を行き憫むサー・ジェームスの後ろ姿を見て、同情の涙に咽んだのであつた。

サー・ジエームスはベル牧師と一緒に自宅へ歸つて来て、夜食を共にした。そして、ベル牧師を寢室へ案内して、自分は二た間三間離れた自分の寢室へ行ったが、それは夜の十時頃だった。

ベル牧師は深夜夢幻の間に、妙な唸り聲を聞いた。陰気に沈んだ物凄いい唸り聲が、時々高くなつたり、低くなつたりする。一人か二人か、入り亂れたやうな足音もするが、唸り聲ですつかり怖ぢ氣が附いてしまつて、ベル牧師には、何が何だかさつぱりわからなかつた。併し、ベル牧師はそれを悪魔だと思つた。きつと、此の家には悪魔が魅いて居るのだと考へて、ベル牧師は一心不亂に祈禱をした。唸り聲が聞こえてから、半時間たつたか、それとも一時間位の後か、遽にけたましい響がして、何か大きな物が、どさりと地面へ落ちたやうだった。愕いて、ベル牧師は窓を開けようとしたが、手が震へて居るので、窓はどうしても開けられなかつた。それから夜の明けるまで、ベル牧師はベッ

トにかぢり附いて、縮み上がつて居た。

翌朝、例の長男のフィリップが、慌たゞしくベル牧師の寢室へ飛び込んで来た。

「おやぢを見ませんでしたかね？」

「いゝえ、お父様が何とかなさいましたか？」

「うむ、それじゃ、あの池だ。」

「なに、池ですつて、池がどうしたのです？」

フィリップの妙な言葉に、ベル牧師は吃驚したが、フィリップはベル牧師の問には答へないで、其のまゝ外へ走つて行つた。

五

其の朝、附近の池から、サー・ジエームスの屍體が擔ぎ出された。

フィリップは、父は自殺したのである、自殺の意志を以て、池に飛び込んだのである、自殺者を出したことは家門の恥辱だから——基督教が自殺を罪惡と

して居ることは、云ふまでもない。しかも、英國では、自殺は法律上の犯罪になつて居る——早速埋葬してしまはなければならぬ、と主張して、其の日の内に、葬式を済ませてしまつた。

村の人々は悉くサー・ジェームスに同情して居た。サー・ジェームスに對する同情は則ちフィリップに對する反感で、フィリップが父の葬式を、犬や猫の屍體を埋めるやうに、簡単に手取り早く済ませたことには、誰しも、不快の感を抱かすには居られなかつた。しかもフィリップに嫌疑を懸けた者もあつたので、其の筋から、屍體の發掘及解剖の命令が下された。

解剖の結果、サー・ジェームスの死因は絞殺だと云ふことになつた。即ち、水死したのではない、誰か首を絞めて、殺して、屍體を水に投じた、と云ふことになつた。

六

解剖が終つて、正式に埋葬することになつた。

屍體の納棺は近親の役目である。いくら不孝者でも、フィリップは長男である。他の親戚の人々と共に、納棺の式に列つたが、不思議や、フィリップがサー・ジェームスの屍體に手を觸れるや否や、フィリップの手を觸れた部分は、解剖の時の疵口ではなかつたのに、フィリップの手が觸れた部分の、すべ／＼とした屍體の皮膚が、遽に口を開けて、紅の血潮がだら／＼と流れ出した。流石のフィリップも眞つ青になつて、『助けて呉れ』と叫んだ。

屍體から斯く遽に血の出たと云ふことは、一寸信ぜられないが、それを現に目撃したと云ふ證人が數名、後に、法廷に於て、其の旨を供述して居る。

當時の迷信に依れば、殺人犯人が自分の殺した屍體に手を觸れると、そこから、遽に血が吹き出すと云ふのである。其の迷信——當時は勿論迷信だとは考へないで、事物當然の法則の然らしむるところだと信ぜられて居た——は起訴の當局を動かした。

直にフィリップは親殺しの罪名の下に起訴せられたが、起訴狀には右の出血の點を詳細に記載して、『之レ洵ニ下手人ヲ告ゲ給フ天意ナリト知ルベシ』とあ

つた。

七

フィリップに對する起訴の事實は三つあつた。

- 第一は不敬罪、之れは此の話には關係がないから、省略する。
 第二は父のサー・ジェームスを早く死ねと呪ひ且同人を殴打したこと、兩親の雙方又は一方に對する呪咀又は殴打は、當時は、死刑に値したのである。
 第三は此の話の父親殺し。

八

父親殺しに付ての證據は次の通であつた。

- 一、前に書いた出血の不思議を目撃した證人數名の供述。
- 二、エディンバラの大學の醫師の鑑定。
- 三、ベル牧師の供述。(之れは僧官の故を以て、證人訊問の形式に依らないで、

陳述書を提出せしめた、それには、當夜の唸り聲の一件を詳しく書いてあつた。

- 四、フィリップの不行跡、特に父に對する暴戾の日常を知つて居る證人數名の供述。

- 五、十三歳の男子及十歳の女子の供述。此の少年少女はサー・ジェームスの下男トムスンの子供だが、當夜自分達の枕許で、フィリップと其の情婦、それからトムスン夫婦の四人が、サー・ジェームスを殺す計畫(之れは夕刻)、それに次いで、殺してしまつた經過(之れは深更)、屍體を池に沈めた顛末(之れは翌昧爽)を語り合つて居た。此の人達は自分等が眠つて居ると思つて、相當大きな聲で話して居たのだが、自分等は怖ろしくて、少しも眠られず、逐一聽いてしまつた、と云ふことを、卒直に供述した。

九

右の少年少女の陳述が、フィリップの斷罪の有力な證據となつたことは、云ふまでもない。

大罪の経過は、無心の兒童の口から、明白になつたのである。陪審員は即座に有罪と答申した。

一〇

フィリップは前記三箇の起訴事實に付て、孰れも有罪となつた。刑罰は勿論死刑だが、之れが又尋常一様の死刑ではない。

先づ犯人を絞殺した。

次に、犯人——實は犯人の屍體——の舌を抜き取つた、其の舌が父を呪つたからである。

次に、右の手を切り取つた、其の手が親を殺したからである。

更に其の次に、首を獄門に懸けた、之れは不敬罪に對する刑罰である。

最後に、フィリップ自身の固有財産の全部は沒收せられた。

一一

天罰はそれだけでは濟まなかつた。

死刑の執行は高い臺へ首を懸けて、自然に絞める仕掛けであるが、どうしたはづみか、高い臺へ懸けた太い綱がぶつとりと切れて、半死の状態のフィリップが、地上にどさりと落ちた、正式にやれば、再度フィリップを高い臺に吊るす筈なのだが、故意か、偶然か、死刑の執行者は其のまゝ地上で、兩手で、フィリップの首を絞めた、機械の作用でなく、人の力で、首を絞められたので、フィリップはもがいて、見苦しい最後を遂げた。丁度自分が父親を殺したやうな工合に、期せずして、自分も同様な方法で、殺されたのである。

因縁はまだ續いた。舌を抜き、右手を斷ち、首を切つた其の残りの屍體が、暫く刑場に曝してあつたが、誰かゞそれを深夜に持ち出して、附近の泥溝へ投げ込んだ。翌朝、其の醜い屍體が、汚い水に浮いて居た。人々はサー！ジェームスの屍體が池の中から出て來たことを思ひ出して、慄然とした。

怪談坊主殺し

一

坊主殺しは大抵崇る——芝居や昔話では、そう云ふことになつて居る。併し、之れは崇つたやうな、崇らなかつたやうな、一向だらしのない坊主殺しである。尤も、英國に在つた實話で、第十九世紀の初期から中葉に互つた、少々不氣味な物語である。

二

英國ウオースターの近くに、オディングレイと云ふ村がある。此の村の教會の牧師は、バーカーと云ふ中年の人だが、此のバーカーの評判は極めて悪い。評判と云ふものは、あてにはならないけれども、バーカーは疍癩持で怒りつぽ

いところへ、各齋で人附合が悪い、殊に傲慢で、百姓を犬畜生のやうに心得て居たから、成程、評判の悪いのも無理はない。

其の頃はナポレオンの全盛時代で、英國の國民は、此の對岸の怪傑を、惡魔のやうに嫌つて、ナポレオンの名のボナバルトを、鴟梟豺狼と同意義の普通名詞に使つて居た、そこで、オディングレイの連中は、牧師のバーカーを「オディングレイのボナバルト」と名付けて、村の集會、冠婚の祝筵は勿論、野良から歸りがけに、一寸居酒屋で一杯やる時ですら、二人寄れば、きつと、「オディングレイのボナバルトのくだばるやうに」と呪咀の乾杯をするのであつた。

三

オディングレイの村民は誰一人例外なく、バーカー牧師を嫌つて居たのだが、其の村民の中でも、重立つた人々、地位も財産も村で第一流のイヴァンス、テラー、バンクス、ジョン・バーネット、ウイリアム・バーネットと云つた連中が、バーカー牧師排斥の旗頭だつた。

或日、此の連中が集つて、癢に障るパーカーの奴を小つびどくやつつけてやらうと相談したが、扱、自分達は相當の名望を荷つて居る、自分達で牧師をなぐり付けると云ふことは、流石に出来兼ねる、之れは、誰かを雇つて、其の手を借りるに如くはない、つまり、金で暴行をやらせるに限る、と云ふことに、評議が決定した。

そこで、白羽の箭が立つたのは、隣村のヘミングと云ふ男、力が強くて、元氣で、剛情者で、貧乏で、しかも目下甚しく窮乏に陥つて居る、之れこそ屈竟の適任者だと云ふので、早速口を掛けたが、人をぶんなぐつて金が貰へる、之れ位有難いことは、一寸ない、斯様な御用ならば、毎日でも結構、委細承知仕る、と云ふ返事である。

ヘミングに對する報酬、即ち暴行料五百圓、當時としては、大金である。併し、委任の内容、即ち暴行だが、殴打か、傷害か、それとも殺害か、どの程度まで委託せられたか、それは判明しないのだが、兎に角、報酬は相當大金だったのである。

此のヘミングは車大工で、家族は女房だけ、赤貧なことは前記の通である。女房は委任の件には、關係がない。

四

一八〇六年の六月十四日の朝、ヘミングはイヴァンスの家へ仕事に行くと云つて、出掛けた。

出掛けるに際して、女房との問答は次の通だった。

『やあ遅くなつた、今日はオディングレイのイヴァンスさん（イヴァンスは退役將校で、キャプテン・イヴァンスと呼ばれて居た、此の時もヘミングはキャプテン・イヴァンスと云つて居る）の家で、厄介な仕事があるのでね、急いで行くのさ。』

『厄介な仕事つてどんな事なの。』

『池から丸木を取出すのさ。』

斯様な仕事は、ヘミングは時々外からも頼まれて居たから、女房は別に不思議

議に思はなかつた。

此の日のヘミングの服装は青色の上着に畝織の半ズボン、穿きならした靴は妙な恰好に踵が歪んで居る——之れはヘミングの足癖で——それから、ポケットには大工用の差金、流石に本職だけあつて、之れだけは忘れない。

五

ヘミングの此の朝の様子には、別に變つたところもなかつたが、近頃の全體の様子にも、一向變つたところはなかつた。強ひて一つ變つたことを求めると、此の二た月三月の間、オディングレイの水呑百姓のクリユウズと云ふ男が、屢屢訪ねて來たことである。クリユウズは之れまでヘミングと親しくはして居なかつたのだが、何の用だか、時々來ては、ヘミングと小聲で頻に話し合つて居た。

六

ヘミングがオディングレイへ行く途中で、水呑百姓のクリユウズと出會つて、居酒屋で一杯飲んで居た。之れは實見者がある。此の時の勘定はクリユウズが拂つた。二人は杯を舉げて、「オディングレイのボナバルト、くたばれ。」とやつて居たが、之れは前に書いたやうに、オディングレイの連中の慣行的儀禮（？）で、誰も不思議に思はないことである。

此の日の正午過に、ヘミングが鐵砲を擔いで居るのを見た者がある。此の鐵砲は誰の所有品だかわからないが、一時兎に角イヴァンスの家になつた物に相違ない——と云ふのが、其の實見者の談である。

七

此の日午後四時過に、突如として一發の銃聲が、村の閑寂を閃裂した。躑て、或庭の垣根から、「人殺し」と叫んで、オディングレイのボナバルト、即ち村一番の嫌はれ者、牧師のパーカーが飛び出した。其の瞬間、同じ垣根から、青い上着に畝織の半ズボンの男が飛び出したが、之れは直にどこかへ消へてしまつ

た。
 パーカーは垣根から飛び出すと同時に、地上に倒れた、倒れた時には、死んで居た。胃部を貫く銃傷が致命的だつたが、頭部に殴打傷がある、銃身で打つたものらしいが、餘程激しく打つたものと見えて、銃身は眞二つに折れた儘、垣根の中に棄てゝあつた。

八

パーカーを殺した犯人がヘミングであること、それは疑問の餘地はないが、兇行の現場から、ヘミングは失踪してしまつた。いくら被害者が村民に嫌はれて居ても、殺人犯を黙許することは出来ない。警察官意は遠近に亙つて搜索の手を盡くしたが、扱、雲へ隠れたか、霧に紛れ込んだか、ヘミングの行衛は全くわからない。

ヘミングの女房もあてのない亭主を待つて居たが、勿論歸つて來ない、數年後に、他の男と再婚した。

パーカーを嫌つて居た連中、特に其の旗頭の村の名望家の人々も、或は死に、或は老ひ込んだ。對岸のナポレオンも死んでしまつた。一世の怪傑も死んでしまへば、まるで颱風の通過したやうなもので、吹き荒した跡の惨害は大きかつたが、風の正體は所詮一場の悪夢に過ぎない。オディングレイのボナバルトも殺されてしまへば、それだけの事で、殺した者も、殺された者も、次第々々に人々の念頭から消えて行つた。

斯くして、春風秋雨、幾年又幾年を閲し去つたが、兇行の後二十四年、一八三〇年に至つて、突如として、問題は再燃した。

九

一八三〇年に、嘗てオディングレイの水呑百姓のクリユウズが住んで居た家を買取つた者があつた。此の家には、二十四年前にパーカーが殺された頃まで、クリユウズが住んで居たのだが、クリユウズが他に移轉して以來、永らく廢屋になつて居たのである。

何しろ二十餘年も廢屋になつて居たのだから、新しい持主は、掃除もすれば、手入もする。そこで、母家に接續した納屋も修繕したが、納屋の床下を掘つて見た時に、骸骨が出て來たので、吃驚した。

骸骨の近くから、大工用の差金が出て來た、朽ち残つた靴の踵も發見せられた。

そこで、先づ思ひ出したのは、失踪したヘミングである。之れはきつとヘミングの骸骨に相違なからうと云ふので、今は他家へ再婚して居るヘミングの元の女房に見せたが、差金にも、靴の踵にも、覺えがある、殊に、髑髏にくつ附いて居る齒の特徴から推して、之れはヘミングに相違ないと確言した。

10

そこで、早速クリユウズが逮捕せられた。

クリユウズの陳述に依れば、バーカー殺しの首謀者は村のお歴々、イヴァンス、テラー、バンクス、ジョン・バーネット、ウィリアム・バーネットの四

人で、ヘミングに五百圓やつて、バーカーを殺させることにしたのだが、自分は其の交渉の使に立つたゞけである、ヘミングがバーカーを殺してから、其の深夜、自分の納屋で、右の四人がヘミングに殺人料の五百圓を渡すことになつて居たのだが、五百圓を渡さないで、四人で、ヘミングを打殺した、五百圓が惜しいからではない、犯行が洩れるのを虞れたからである、此の時の發頭人はイヴァンスで、自分は納屋を貸したゞけで、自分は口止料なり、使賃として、イヴァンスから、二百七十圓と、二百二十圓餘の馬一頭とを貰つた、之れがざつと五百圓で、つまりヘミングにくれてやるべき報酬が、自分に振向けられたのだ、と云ふのである。

11

バーカー殺しの首謀者の中で、テラーとウィリヤム・バーネットとだけが生きて居た。此の二人は家も益々榮へ、名望も更に高くなつて居る。首謀者だか、幫助犯人だか、兎に角自分自身は幫助したに過ぎないと云つて居るクリユ

ウズは、もと／＼水呑百姓で、今は年は取つて居るけれども、依然として、貧乏である。

どう云ふ譯だが、地位のあるテラーとバーネットとはバーカー殺しの幫助犯として、貧乏人のクリユウズはヘミング殺しの主犯及バーカー殺しの幫助犯として、法廷へ送られた。詳細に云へば、三人全部に對して、ヘミング殺しの主犯及バーカー殺しの幫助犯として起訴陪審に付せられたのだが、テラーとバーネットとに對するヘミング殺し主犯被告事件の起訴は、起訴陪審員に否定せられたのであつた。之れが少くとも一部の人々の反感を招いたやうである。

二二

甚不條理なことだが、當時英國に於ては、主犯が有罪にならない限は、幫助犯人は罰せられないことになつて居た。そこで、バーカーを殺した當人ヘミングは死んで居るのだから、バーカー殺しの幫助被告のテラーとバーネットとは無罪になつた。

残つたのは、クリユウズだけである。尤も、クリユウズに對しても、バーカー殺しの幫助事件は無罪で、ヘミング殺しの主犯事件だけに付て、審理が進行した。併し、陪審員はヘミング殺しに付ても、幫助犯として有罪、即ち主犯には非ず、と云ふ答申をしたので、係判事は、然らば、寧ろ當然に無罪と評決すべきものだと思へた。陪審員は即座に評議して、無罪と答申した。之れで一切が解決したが、當時の法規の缺陷の爲とは云ひながら、馬鹿々々しい結末である。

英國に於て、主犯の罰せられない限は幫助犯を罰することが出来ないと思ふ制限を撤廢して、主犯と幫助犯とは各獨立して、別々に處罰し得ることを、法律で定めたのは、此の事件の後數年のことである。

首締名人物語

死刑のいろいろ

死刑の手段には種々あつて、現在文明諸國に行はれて居るものでも、絞殺、斬殺、銃殺、瓦斯装置、電気仕掛といろ／＼になつて居るが、大多數は絞殺で、日本も英國も此の點では、同じことである。併し、非常に違つて居るのは、絞殺者即ち死刑執行者の制度である。

珍商賣「首締め業」

英國の死刑執行者は純然たる官吏ではない。元來、英國の制度には、古風な、間の抜けた、併し面白いものが、尠くないが、死刑執行の如きも、其の著しい一例で、私人の請負仕事になつて居る。勿論、死刑執行は公務である、公務だ

が、之れは私人が請負つて居るのである。即ち死刑執行業——首締め業と云ふ特殊の請負仕事で、英國には在るので、尤も之れは專業ではない。副業で、内職になつて居るのである。そこが又、いかにも面白い。私の滯英中の數年間は、エリスと云ふ散髪屋の老主人が死刑執行業をやつて居た。此のエリス老人のことは、私は嘗て書いたことがあるから、こゝには反覆しないが（拙著「正義の殿堂より」五五六頁）今は別の人が代つて居る。

ひと締め一百〇五圓也

英國では、監獄の事務は内務省の管轄だから、死刑執行人は内務省の御雇だが、報酬は請負式で、一件五ギニー（五十二圓五十錢）別に善行賞と云ふ名義で、五ギニーの手當が出るから、合計十ギニー（百五圓）、監獄までの旅費は、三等の汽車賃を支給せられる。死刑執行は午前中だから、前晚から行つて、準備をする。此の時は夕飯の御馳走になる。即ち、辨當向ふ持ちの請負仕事である。

請負仕事で、しかも專業ではない。エリス老人は散髪屋で、平常は客の頭髪を刈つて居るが、死刑執行の際には、内務省からの通知に依つて、監獄へ行つて、囚人の首を締めるのである。

請負仕事だが、請負人は一人ときまつて居て、其の外に副手、つまり候補者が一人か二人出来て居る。本請負人が差支の場合には、此の候補者が出かけて行くのである。

死刑執行は公務だから、本來は私人だが、死刑執行と云ふ公務を執行する資格に於て、此の請負人も請負仕事の範囲内に於ては、『御役人』であり、『御用』である。

私人でしかも公務を擔當すると云ふのは、嚴格な法律論をすれば、現在の我國の制度上でも、あることはあるが、死刑執行が私人の請負仕事だと云ふに至つては、いかにも突飛である。併し、英國では、古い昔から、さうきまつて居る。しかも、死刑執行と云ふと、辛い勤のやうだが、英國人一般の觀念としては、寧ろそれを敬愛して居るのであつて、其の意味に於て、死刑執行人の本職

(死刑執行の方が内職であることは、前に書いた) はなかなか流行する。エリス老人は散髪屋だったが、お客が死刑執行の話を書く爲めに、散髪に行く。「大將、昨日又一つ首を締めたさうだが、旨く行つたかね。」と云つたやうなお客が、澤山來たさうである。

首を締めて四十五年

さて、第十八世紀から第十九世紀に亘つて、英國で、有名な二人の死刑執行者が居た。首を締めた期間が長くて有名なのが、カークラフトと云ふ男で、勤續四十五年、約半世紀に亘つてゐる。評判が好くて有名なのが、マールウッドと云ふ男で、在職九年間、『紳士的首締人』と云はれて居た。

カークラフトは二十九歳の時に、數名の候補者のうちから、拔擢せられて、死刑執行の請負人になつたのだが、其の當時は、靴職で、後には、専ら兎と鳩との養殖業をやつて居た。即ち、家畜を殖やすことが本業で、悪人の種を絶つことが、内職だったのである。

カークラフトは四十五年の長きに亙つて、首締業に従事して居たのだが、彼の首締めの技術は、決して上乘の方ではなく、囚人が死ぬるまでに、七分以上もかゝつて、首締臺で、大變苦しんだと云つたやうなことも、一二度はあつたやうである。彼れ自身も、首締業には、左程の興味を持つて居なかつたらしく、いつ誰の首を締めたと云ふことは、よく記憶して居なかつたさうである。死刑執行の際に、已むを得ない差支が起ると、副手が代つて、それを擔當するのだが、若しそれが有名な犯人に對する死刑だつた場合には、執行の機を逸した執行人は、自分自身の手^に掛けなかつたことを口惜しがるものだと云ふことだが、カークラフトは、左様なことには、いつも平氣だつた。家庭に於ける彼れは、模範的の好人物で、細君との仲も良く、子供を非常に可愛がつて居た。一八四八年の四月二十日に、ブリストルで、十七になる少女の首を締めた時には、流石にカークラフトもひどく同情して、『私も此の位、氣の毒に思つたことは、ありませんでしたよ、何しろ、あの女位、綺麗で利巧な女は、どこへ行つたつて、ありやしませんからね。』と頻にこぼして居た。此の少女はセラール。

ハリエット・トーマスと云つて、生れながらにして、不幸な女だつた。家が貧しくて、幼い時から、下女奉公にやられた。勤め先の女主人が評判の因業者で、セラールを打つ、殴る、甚しき^に致つては、食事も與へないと云つたやうな始末で、或夜、セラールは憤慨の極、眠つて居る女主人の頭を石で打つた、殺す積だつたかどうかはわからないが、法廷では、殺人罪と宣告せられた。英國では、殺人罪の法定刑は死刑だから、當然死刑の言渡にはなるが、判事又は陪審員の推^レ申^ンに因つて、減刑になることもある、尤も、殺人罪でなく、傷害致死罪と判定せられると、軽くなるのだが、セラールは殺人罪と認められて、しかも、何等の推申がなかつたのである。死刑の時には、『私は死に度くない、内へ歸して下さい、歸して下さい。』と泣き狂つて居たが、牧師の説教を聴いて、泣き止んだ。併し、死刑執行臺を見ると、又泣き出したので、カークラフトも涙を誘はれたのであつたが、死刑執行は、兎も角も支障なく済んだのであつた。

カークラフトの愛妻は同棲四十五年にして、先づ此の世を去つた。残されたカークラフトはひどく悄氣で、減多に外へも出ないやうになつたが、それでも、

死刑執行の役目だけは勤めて居た。併し、カークラフト自身も七十に餘る高齢だし、腕も大分鈍つて來たので、前例のない多分な恩給を與へて、引退させることにしたが、それには、カークラフトは非常に不平だつた。自分はまだ腕に自信があると頑張つたが、彼れの願は採用にはならなかつた。カークラフトは引退の後五年、八十歳で天壽を終へた。

死刑フアン

カークラフトの次の死刑執行人はマーウッドである。カークラフトは其の穏和な人柄から、人に嫌はれたことはないが、其の技術は優秀の方ではなく、殊に晩年は、少くとも其の役目に付ては、人に厭がられて居た。之れに反して、マーウッドは其の在職九年間の前後を通じて、人柄に付ても、將た又、技術に付ても、人に可愛がられもしたし、褒められもした。彼れは上品な愛嬌者で、しかも、死刑執行は彼れの大に得意とするところで、好きこそ物の上手なりけれの諺通りに、彼れの技術は全く前古に空しとまで、賞揚せられた。

マーウッドの本職は靴職で、若い時から、死刑執行に興味を持ち、當時死刑執行は公開だつたから、大抵の現場は見て廻つた。即ち死刑フアンである。死刑執行を見て廻つて居るうちに、彼れは最善の首締方法と云ふものを發案した。それは囚人の體重に按配して、紐の長さを測定し、身體が下がると共に、的確に首が強く締められる、即ち、犯人が苦しまずして、即死すると云ふ考案で、體重測定を第一義とする英國現在の死刑執行方法の原案である。彼れは屢々自己の考案に付て、當局に上申し、在來の——ともすれば、囚人が首を締められてから、長く苦しむ——方法の改善を促し、かたゞ、自薦運動にも供して居たが、遂に一八七一年、彼れが五十一歳の時に、或地方の死刑執行を委ねられ、越えて、一八七四年から、本職の死刑執行人に指名せられるに至つたのである。多年の望が叶つて、マーウッドは死刑執行人となつたが、靴職の本業は勿論棄てない。得意になつて、彼れは靴直しの看板に、『御用』と書き込み、自分の名前に『死刑執行人』と云ふ職名を附けた印判を拵へて、手紙にでも、注文書にでも、それをぺたくと押し付けた。カークラフトの無口だつたのに反して、

彼れはおしやべりだつた（尤も、話の旨い男ではなかつたけれども）、カークラフトと自分とを較べて、『あいつは首を締めたのですが、あつしのは死刑執行なので……』と云つて居た。

得意なだけに、彼れは上手だつた。自慢はするが、根が好人物で、田舎風は抜けないけれども、身だしなみは相當にする。それが則ち「紳士的首締人」の綽名の存する所以で、上下の評判が誠に宜かつた。

一八七九年の二月二十五日に、第十九世紀に於ける英國隨一の怪盜、ピースの首を締めたのは、マーウッドの得意中の得意の大事件である。ピースは音楽が上手で、發明家が隠居して居るのだと云ふ假面に隠れて、法網を免れて居たが、或日汽車のなかで、偶然マーウッドと逢つた。ピースは冗談好きな男で、『僕をやる時にはね、油をうんと奮發して、紐の滑りをよくして呉れ給へよ。』と云つた。マーウッドは、此の紳士が大泥棒だとは氣が附かない、奇抜な冗談に對して、苦笑を以て答へるの外はなかつたが（右はピースが自ら隣人に語つたところだが、此の話自身も冗談かも知れない）、ピースに對する死刑執行の時

には、マーウッドがそれを擔當したのであつた。勿論、死刑は旨く執行せられた。

一八八三年はマーウッドの忙しい年で、即ち、得意な歳だつた。愛蘭の私黨事件で、死刑の數が多かつたからである。併し、此の年の秋に、風邪がもとで肺炎になつて、六十三歳にして、彼れは死んだ。

英國近世の死刑史に付て、其の在職四十五年の長きに亙つたことに於て、カークラフトは特筆せらるべく、執行方法を改善し且死刑執行人が一般人に愛好せらるゝ端を啓き、従つて、事實上、死刑執行人の社會上の地位を高めたことに於て、マーウッドの功績は閑却すべからざるところのものである。

魔 女 峽

一 嘘のやうな實話である、しかも、近年、即ち一九三〇年に、匈牙利のソロク地方裁判所にあつた裁判事件である。

二

匈牙利のブタベストから東へ七十哩餘のソロークは、兎も角も相當の都會だが、そこから二十五哩程離れた山の中に、ナギレフ、テイサクトと云ふ二つの村がある。此の二個村だけ、山に包まれ、此の世を隔て、武陵桃源と云ひ度いが、實は半農半樵の寒村で、文明の恩澤には大分遠ざかつて居る。何しろ、二十五哩も離れたソロークまで行かなければ、汽車が見られないと云つたやう

な僻邑である。住民は東邦人の血を幾分か承けて居る、それだから——と西洋人は云ふのだが——餘程現代離れがして居るので、男はやたらに酒を飲む、飲めば勿論酔ふ、酔へば女を打つ、ナギレフとテイサクトとの女は、男に打たれる爲に、生まれて來たやうなものだ、と物の本には書いてある。

三

山に囲まれた寒村で、物資に乏しい。斯様な村で、得て行はれる犯罪は、墮胎である。

丁度今から四十年程前に、此の村へ、一人の産婆が移住して來た。スーシ・オラーと云ふ女である。移住して來た時には、二十代だつたゞらうが、太つた醜い女で、若い時から、婆さんのやうな顔をして居た。此のスーシ・オラーは産婆と云ふよりは、寧ろ墮胎の手傳ひが専門で、従つて、大變に繁昌した。

然るに、墮胎は決して安全な手段ではない、専門の醫師ならば、安全な墮胎手術をすることが出来るかも知れないが、スーシ・オラーの醫學上の知識は甚

怪しいもので、彼女の墮胎は多く母胎の危険を伴つた。即ち、彼女の無謀な手術に依つて、可憐な死を遂げた女が尠くなかつた。

犠牲者が續出するのだから、其の屍體の検案に依つて、容易に犯罪發覺の端緒が得られる筈だが、死亡診断書を作る村吏が素人で、鳥の羽根を死人の鼻に當て、見て、それが動かなければ、死人として、葬式の許可を與へる。死亡の原因はどうでも宜いのだ。加之、今から十四五年このかた、此の死亡診断書作成の職務は、スーシ・オラーの婿に委ねられて居た。此の先生も、勿論醫學の素養はない、本職は村の小使で、集會の知らせに、大きな鈴を振つて歩く、それが、此の男の本職で、兼務が則ち死亡診断書の作成である。尤も、此の男は死亡診断書に、死因を書いた。併し、此の男の知識では、人の病氣の種類は三つか四つで、熱病、心臟病、卒中、中毒のうちのどれかに、總べての死因を片付けてしまふ。

四

スーシ・オラーは盛に墮胎の依頼に應じて居たのだが、時々失敗して、母胎を犠牲にしたことは、前に書いた。之れには、スーシ・オラーも流石に少々閉口して居た。そこで、何か工合の宜い方法を案出し度いと焦つて居たが、もともと醫學の素養がないのだから、適當な考が出て來る筈はない。思ひ餘つて、スーシ・オラーは墮胎の代りに、赤ん坊を毒殺することを考へ出した。之れまでは、墮胎をやつたから、時々失敗したのだ。赤ん坊を無事に産ませて、其上で、毒殺すれば、死ぬるのは赤ん坊だけで、母の身體に危険はない、これだ、これだ、これに限ると、スーシ・オラーは途方もない悪事を案出した。

五

爾後、墮胎犯は嬰兒殺の犯罪に代つて、スーシ・オラーは益々繁昌した。毒薬は嬰兒を殺す材料となつたばかりでなく、大人を殺す道具にも供せられた。スーシ・オラーは自分の競争者たる他の産婆を三人、しまひには、自分の亭主をも殺した。それは、自分に新しい情夫が出來たからである。

六

無智の人々の間には、情事の忌まはしい沙汰が絶えなかつた。痴情の爲の殺人事件は、例の毒薬に依つて、容易に、しかも安全に、頻に、行はれた。安全と云ふのは、例の死亡診断書が前記のやうな始末だから、一切が暗から暗に葬り去られたからである。

忌まはしき犯罪、しかも忌まはしき原因に基く犯罪に付て、私はそれを叙述することを好まない。詳細な記載を避けるが、此の二個村に於ける痴情の殺人事件に在りては、犯人は常に女で、被害者はいつも男だつた。そして、黒幕の總本尊は云ふまでもなく、悪産婆スーシ・オラーだつた。

七

幾十年に亘る此の二個村の犯罪も、遂に發覺の秋が來た。それは一九二九年の七月のことで、牧師の申告が其の端緒となつたのである。

數十人の被告人（女）はソロークの警察署へ拘引せられた。

スーシ・オラーも被告人の一人だつたが、検事局では、犯罪の證據不十分と云ふ理由で、スーシ・オラーだけを釋放した。

悪虐の張本人スーシ・オラーは、釋放と共に、べろりと赤い舌を出して、山の村へ歸つて來た。歸ると同時に、十數軒の家を訪ねた。訪問を受けた家の主婦は、皆例の殺人犯で、まだ檢擧を受けて居ない連中だつた。それ等の女に警告を與へて、扱、安心して、家へ歸つて、又ぞろ、べろりと赤い舌を出して居ると、どや／＼と多數の人が入つて來た。おやつと思つた。欺しおほせたと思つたが、矢張一杯食はされたのである。釋放は實は他の犯人を探り出す手段で、スーシ・オラーが村へ歸り、共犯連中を訪ねて居るのが、一々尾行の警官に依つて、檢事に報告せられた。檢事は報告に依つて、一人残らず、逮捕を命じ、最後に、總本尊のスーシ・オラーを檢擧せしめたのである。

スーシ・オラーは咄嗟の間に、これはしまつたと思つた。そして、直に便所へ駆け込んで、縊死してしまつた。

吞舟の大魚は自殺したが、ソロークの地方裁判所で、被告人として審理を受けた女は、三十一人、そのうち五人は、未決監で自殺した、残りは悉く有罪、軽きは懲役五年、重きは死刑、事件の終了したのは、一九三〇年の夏だった。

或無罪の話

少しく前の話である。

x

x

x

若い綺麗な歌手、マリー・ビエールの評判は、巴里はもとより、佛蘭西の隅隅までも、鳴り響いて居た。何しろ、歌のうまいことは、云ふまでもないが、品行が方正で、浮いた稼業には全く珍しい、清い可憐な乙女だったからである。此のマリーが南歐ビヤリツツの寄席に出演した時には、其の人氣は彌が上にも、湧き立つた。ビヤリツツは酒と博奕との歡樂境である。色鮮やかな緑の樹樹に、常世の春の日の光が映え輝く、晴れやかな遊覽地である。其のビヤリツツに、花のやうに、マリーは咲き出したのであつた。

勿論、言ひ寄る男は多かつたが、そのうちで、ロベール・ジャンシャンと云ふ若い紳士と、マリーは遂に相許すことになつた。ロベールは金持で、美男子

で、氣前がいゝ。堅いと云はれたマリーも、ロベールには、いつか牽き附けられてしまつたのであつたが、マリーとしては、一時の淡い戀の戯ではない、固く終世を契つて、妻となり夫となることを、衷心深く誓つたのであつた。

併し、ロベールは富豪の子弟に得てあり勝ちな、勝手者で、浮氣者だつた。一旦、マリーの愛を贏ち得るや、狂熱はさらりと冷却して、マリーのロベールに對する愛着の思が、強くなればなる程、彼れの彼女に對する態度は、苛酷の度を加へて來た。曩には、楽しく手を携へて巴里へ歸つて來たのであつたが、今は、マリーは裏町に、寂しく、男のおとづれを待ち詫びて、泣く夜も繁くなつて來た。

マリーがロベールの胤を宿してからは、ロベールはふつつりと寄り附かなくなつた。暗涙に咽びながら、彼の女は日記のなかに、書き附けた。

『わたしはいつまでもロベールを思つて居る、併し、ロベールはわたしを棄てた、離れて行く人を戀ふる苦しさ、あゝ、悔ひ且慕ふわが心よ……』
可愛いゝ女の兒が生まれたが、ロベールは矢張寄り附かない。みどり兒は弱

かつた。若い優しい母は、おろ／＼して、病兒の介抱に、身も心も捧げて居たが、此の頃から、日記の文字は漸く激烈になつて來た。

『あかちゃんの加減が悪い、若し萬一のことがあつたならば、其の責任はロベールにある、あかちゃんが死んだなら、ロベールも死ななければならぬのだ……』

病兒は遂に死んだ。生後六ヶ月だつた。ロベールが仕送りをしないものだから、十分な手當が出来なかつたのである。

日記には、次のやうな文句がある。

『可愛いゝあかちゃんが死んでから、五ヶ月になる、わたしはあかちゃんの後を追ふ、併し、ロベールも一緒に連れて行く……あかちゃんは墓の中で寂しさうだ、わたしも行く、ロベールを連れて……』

マリーが斯様な日記を書き續けて居る頃、ロベールは派手な女優と同棲して居たが、其のことは、マリーの耳にも傳はつた。

x

x

x

x

或日、マリーは痩せ衰へた腕をさし伸ばして、棚の上から、ロベールの寫眞をおろした。そして、しげくと戀しい、恨めしい男の顔を見詰めて居たが、やがて、鉛筆で、其の裏に、『まりーが死刑ニ處シタルるべしハ此ノ男也』と大きく書いて、なほも其の寫眞を眺めて居たが、いきなり、それを口に當て、いくたびか、熱い唇を附けた。涙がぼろ／＼と流れ落ちた。やゝあつて、靜かに、寫眞を筆筒にしまつて、よろ／＼と、彼の女は外へ出た。

其の翌晩、マリーは拳銃を隠し持つて、ロベールの家の玄關近くに紛れ込んで、植込みのなかに忍んで居た。まもなく、ロベールは同棲中の女優と手を取り合せて、何か高らかに、笑ひ興じながら、通りかゝつた。

其のロベールに、發矢とばかり、マリーは二度拳銃を發射した。ロベールは相當重い傷を帯びたが、生命には別條がなかつた。マリーは其の場で逮捕せられた。

法廷に於ては、一切が如實に明白になつた。マリーがロベールを殺さうとし

て、殺意は遂げなかつたが、重傷を與へたこと、マリーとロベールとの最初からの愛欲の顛末、殊に、マリーの素行の正しかつたこと、ロベールが之れに反して女蕩らしの名人だつたことが、證據に依つて、的確に示された。

陪審員の答申に基いて、法廷はマリーに無罪釋放を言渡した。

此の裁判が正しいか、否や、それをこゝに論ずる考はない。たゞ、外國に於て、斯様な事例のあつたことを書いてみたゞけである。

羊 訴 訟

百年ばかり前のことである。

愛蘭の片田舎の寒村に、甲と乙との二人の百姓が居て、此の二人で百一頭の羊を共有して居た。何しろ、貧乏村のことだから、二人で百一頭の羊を持つて居ると云ふことは、村民の羨望の的で、此の二人が村一番の財産家だったのである。

然るに、何かの理由で、甲乙二人の仲が悪くなつて、これまでの共有關係を持續することが出来なくなつて、共有の羊を分けることになつた。即ち所謂共有物の分割である。ところが、羊の数は百一頭だから、まづ、五十頭づつ分けなければ、最後の二頭は分けられない。仕方がないので、最後の二頭は其の儘にして、半分づつの所有權が兩人に屬することに、きめて置いた。

暫くして、甲は例の最後の二頭の羊の毛を刈らうと云つたが、乙はそれに反

對した。甲と乙とはいがみ合つて居るのだから、とても、相談は纏らない。そこで、甲は其の羊の半分だけ、毛を刈つた。即ち、半裸半毛の羊が出来てしまつたのであつた。

然るに、或日、此の半裸半毛の羊が溝に落つちて、死んだ。そこで、仲の悪い甲乙二人の間に、厄介な紛争が持上つた。半分毛を残して置いたものだから、體重の釣合がとれなくつて、羊は溝に落ちちたのだ、即ち羊の死亡に付ては、乙に責任がある——と甲は主張した。いや、半分だけ毛を刈つたから、羊は風邪に罹つて、それが死因となつたのだ、即ち甲に責任がある——と乙は頑張つた。お互に、相手方に責任をなすり付けて、損害賠償を要求した。何しろ、仲の悪い兩人だから、妥協の途はない。雙方から、それ〴〵訴訟を提起した。

扱、此の羊訴訟はどうなつたか。いや、どうなつたかぢやない。訴訟には勿論費用がかかる。お互に訴訟に熱中して、其の費用の爲に、遂に囊に分けた五十頭づつの羊を皆賣拂つてしまつた。訴訟の片付くまでに、二人とも無一文になつて、夜逃げをした。羊半分のことから、羊五十頭の全財産を棒に振つてし

まつたのである。
 濫訴は儘に弊害を伴ふ。近頃諸國で調停制度が高唱せられるのは、結構なことである。

夫婦挿話 一一一

一

佛蘭西革命の犠牲となつたルイ十六世は、決して惡虐な暴君ではなく、又必しも凡庸な國王でもなかつた。しかも、同じく斷頭臺の露と消えた王妃マリ・アントアネットに至つては、才色兼備で、王者の配たる資格に、缺くるところはなかつたのだが、此の二人の仲は決して圓滿ではなかつた。二人の間には、深い理解もなければ、篤い同情もなく、殊にお互の情愛が極めて乏しかつた。要するに、薄命の二人は、其の婚姻に於ても、不運だつたのである。

盛大な婚姻式の擧げられたのは、ルイ十六世の太子時代で、太子は滿十五歳九ヶ月、太子妃は漸く滿十四歳六ヶ月に過ぎなかつた。

其の頃の太子は、元氣でまる／＼と太つて居た。はぢきれるやうな健康體だ

つたから、太子は殊に大食だつた。

婚姻の當夜、太子と太子妃とは相並んで、華やかな晩餐の席に就いた。

其の時に、國王のルイ十五世（太子の祖父）が太子の袖を引いて、囁いた。

「今夜はあまり食べちゃいけないよ。」

併し、太子には、それが何よりも不平だつた。

「だつて、うんと食べないと、よく眠れないんですもの。」

太子は矢張うんと食つた。

太子は毎日丁寧に日記を書込んで居た。婚姻式の當日の欄には、たつた一字「ナシ」(«Rien»)と書いてある。

二

ビスマルクの夫人は結婚後一年餘りで、女の子を産んだ。それがビスマルクの長女で、後にランツアウ伯爵夫人となつたマリイである。此のマリイの生まれた時に、ビスマルクは有頂天になつて喜んだ。そして、早速父に安産通知の

手紙を出したが、其の文句は次の通である。

「……人間の子にあらで、猫の兒が生まれ來れりとするも、とにかく、ヨハナ（ビスマルクの夫人）が生みの苦限より救はるゝ時は、祭壇に跪きて、感謝の熱涙を捧げばやと存居候ひしが、芽出度く女子平産、嬉しき事に有之候。」

三

ウイーラント（一七三三——一八一三）は云ふまでもなく、當時獨逸詩壇の重鎮で、ゲーテや、シルレルも兄事して居たのであるが、人柄が殊に上品で、圓滿な紳士だつた。

或日、ウイーラントを訪ねた女客がウイーラント夫人を見て、「奥様はゲツキング（矢張當時の詩人）の奥様によく似てゐらつしやいますね、まるで、見違へる位、そつくりです。」と云つた。

ウイーラント夫人はゲツキング夫人とは親類でも何でもない、二人がよく似て居るとすれば、それは他人の空似なのだが、ウイーラントはゲツキング夫人

を見たことはなかつた。右の女客の言葉を聽いて、ウィーラントは靜かに云つた。

『さうですか、そんなに似て居ますか、似て居ると云はれるのは、顔や形のこととせうが、若し、心までも似て居るのならば、ゲッキングの爲に、大いに祝福すべきことなのです、私は此の女（ウィーラント夫人）と十九年連れ添つて居ますが、此の十九年間の體驗に依つて、私は無上の仕合せ者だと確信して居るのです。』

之れを聽いて、ウィーラント夫人はウィーラントの手をしつかりと握つた、夫人の眼には感謝の涙が溢れて居た。ウィーラントは徐ろに夫人の手を取つて、幾度か熱い接吻を注いだ。

此の優しくゆかしい光景に、女客も其の同伴者も、齊しく、貰ひ泣をしたと云ふことである。

四

ヘルデル（一七四四——一八〇三）は神學者であり、哲學者であつて、同時に又、文人だが、其の夫人も相當の識見があつて、夫妻互に相譲らざる趣があつた。二人共それ／＼主義もあり、意見もあつて、同じ家には住んで居たけれども、妻は一階に、夫は二階に、各自部屋を定めて、別居して、互に書籍の城壁を固めて、對峙して居た。尤も、決して音信不通ではない。用事があれば、手紙で文通をする。其の手紙が又大變で、一日に何十回と云ふ頻繁さである。厄介なのは女中で、此の手紙の爲に、階段の上下をするのが、なま優しい仕事ではない。斯く、一階と二階との間で、手紙のやり取りを重ねて居るうちに、しまひには夫人の方で辛棒がしきれなくなつて、女將軍みづから敵陣に乗り込む。即ち、夫人がヘルデルの部屋を訪れる。そして、ヘルデルの書いて居る原稿を奪ひ取つて、わざと大きな聲で、それを讀み上げる。讀んで居るうちに、夫人がそれに感心してしまふ。

『まあ驚いた、實に堂々たる卓見だわ、まるで人間業とは思はれない、こんな人に不満を抱くつてことはないわ……』

流石のヘルデルも、此のニコボンには降参して、平和克復と云ふことになる。

五

ゲーテが家政婦のフルビユウスと正式に結婚した時には、誰もあいた口が塞がらなかつた。何しろ、詩壇を壓する大家で、臺閣に列する貴族である。其のゲーテが、以前は花賣娘だつた無學な女と結婚したのだから、之れは、吃驚するのが當り前である。併し、フルビユウスはゲーテに對しては、獻身的に忠實だつた。結婚してから後も、夫としてよりも、寧ろ主人として尊敬し、常に「顧問官閣下」と呼んで居た。ゲーテも決してフルビユウスの無學を咎めなかつたが、時々、「あれがまるで詩がわからないのだが、それは不思議な位、わからないのだ。」と苦笑して居た。フルビユウスの死んだ時には、ゲーテは其の死骸に縋つて、聲を立て、泣いた。

六

ルーテルの云つた名文句。

「篤信にして親切、神を畏れ、家事に忠なる妻こそ、最高の天恵なれ。」

巨怪懺悔

一

一七九三年七月の中頃、永い日も暮れ初むる刻限に、巴里の或町に、革命の危難を遁れて居る神父ケラヴナンの隠れ家を訪ねた異様な男があつた。赤い色の上着がひどく汚れて、解けたカラーが、だらりと胴着へ垂れて居た。高帽子の下に、太い、逞しい眉毛がくつきりとして、鼻も、口も、人並外れて大きく、唇が歪んで、頬には、深い痘痕があつた。醜いけれども、男らしい容貌である。穢いけれども、堂々乎たる雄姿である。併し、顔から胸へかけて、身體の上半分は頑丈だつたが、腰から下は、不思議に弱々しく、其の歩調も健かではない。

「神父さんは御在宅かね？」

「神父さんですつて？ そんな人は内には居ませんよ。」

神父ケラヴナンは革命承認の宣誓を拒んで居る。此の宣誓を肯じない僧侶は、革命裁判所へ送られて、そこで死刑の言渡を受けて、直ぐにギロティンで首を刎ねられるのである。其の追究を避けて、ケラヴナンは此の裏町の裏長家に隠れて居るのだから、異様の訪客に對して、ケラヴナンの老婢が、左様な人は居ないと云つたのは、寧ろ當然の措置だつたのである。

併し、訪客はそれには僻易しなかつた。「いゝや、私は神父さんに頼み度いことがあるのだ。しかも急用でね。」と云つて、無遠慮に、つか／＼と、奥へ進んで行つた。

神父は薄暗い部屋で、お経を誦して居た。不意の訪客に愕いて、立ち上つたが、訪客の顔を一瞥して、眞つ蒼になつた。醜い、穢い、大きな顔！ 力強い、凛々しい、大きな顔！ それは、紛れもなく、革命の大立物、日に幾百幾千の人々に死罪を言渡すことを以て其の職能とする、彼の怖ろしい革命裁判所の創設者、ジョージ・ジャック・ダントンの顔だつたのである！

神父ケラヴナンはダントンの顔を見て、眞つ蒼になつたが、ダントンは軽く

之れを制止して、いくらか自分もはにかんだ調子で、「神父さん、私は懺悔に参つたのです。どうか、私の懺悔を聴いて下さい。」と云つた。

従來の宗教の一切の儀禮を破却した革命政府、自己に追隨しない僧侶の全部を死刑にした革命政府、其の革命政府の大立物のダントンが、暮夜ひそかに、亡命の神父を訪ねて、古い形式の懺悔をしたのである。

此の懺悔の内容に付ては、ダントンもケラヴナシも、絶対にそれを外に洩らさなかつたから、今は全く知る由もなき歴史上の謎である。

二

ダントンの懺悔の内容は不明だが、懺悔の動機はほとゞ推測し得られる。それは、戀の爲である。結婚の爲である。ミラボーの後を承けて、執行政府の實權を掌握し、内外を攝伏せしめた巨怪ダントンにも、優しい戀はあつたのである。

ダントンは最初は辯護士だつた。若い、熱心な、併し一向依頼者のない、心細い辯護士だつた。裁判所の近所に、よく辯護士の出入する「カフェー・デュ・

バルナス」と云ふカフェーがあつた。ダントンも矢張よくそこへ通つて、その娘のガブリエルと戀仲になつた。娘の両親は、ダントンの將來にあまり矚目して居なかつたので、大分躊躇はしたが、兎に角、二人の結婚を許した。それは、ダントンが二十八、ガブリエルが二十五の時である。

結婚當初の新郎新婦はさゞやかな家庭に、つゞましい享樂を味つて居たが、革命の波は、遂に此の無名の少壯辯護士を政界の渦中に送つて、ダントンを執行政府の大立物、司法大臣、革命裁判所の創設者とし、佛國革命に第二の時機を劃出した。併し、ガブリエル夫人はあまり幸福ではなかつた。ダントンは革命に狂奔して、家庭に愛妻を顧る暇がなく、結婚後數歳にして、ガブリエルは寂寞を啣ちつゝ、死んだ。

ダントンの二番目の夫人のルイゼは、下級官吏の娘だつたが、全然舊式に育てられて居た。十五の時に、結婚を申込まれて、十六の時に、妻となつたのだが、此のルイゼは、決してダントンを愛して居なかつた。寧ろ反對に、ダントンを怖れて居た。そして結婚の條件として、之れまでダントンの犯したさまざま

まの怖ろしい罪を、神父の前で懺悔して呉れと云つた。ダントンは盲目的に此の少女を戀ひ慕つて居たから、其の歡心を買ふ爲には、いかなる犠牲をも、喜んでそれに供へたのであつて、暮夜ひそかに、神父ケラヴァンを訪ねたのも、矢張其の爲だつたのである。

三

ルイゼと結婚して間もなく、ダントンは其の政敵で惨虐政治の權化たるロベスピールに捕へられて、刑場に送られた。ダントンの最後は悲壯で且豪快なものであつた。斷頭臺の上に立つて、見物の公衆を瞰下した時、神父ケラヴァンの顔がそのなかに見えた。ケラヴァンはダントンの最後を見届ける爲に、群集に紛れ込んで、來て居たのである。ケラヴァンの見上げる眼と、ダントンの見下す眼とが、期せずして、一緒になるや、二人は互に、無言の裡に、微笑した。そして、一世の巨怪ダントンは、解脱した高僧の如く、莞爾として、此の世の最後の旅に立つたのであつた。

思ひ出すこと

一

一高時代の友人に逢ふと、よく「お母様はお達者かね」と問はれる。私の在學時代には、母は郷里に居たのだから、之等の友人は私の母を知らないのだが、私の母は、或意味に於て、友人仲間に有名になつて居た。

私の父は、若い時に病死して、母はそれ以來獨身で、私には兄弟もなければ、姉妹もない、母から見れば、私はたつた一人の子、私から云へば、母はたつた一人の親である。尤も、郷里の家には、祖父も居たし、近村に親類も多かつたけれども、たつた一人の子を、百何十里も離れた東京の、しかも誰一人世話をして呉れる者のない寄宿舎——私は一高在學中は、ずうつと寄宿舎に居た——に手放して置くことは、心配で／＼たまらないので、朝起きて、先づ念頭に浮

ぶのは、私からの通信であつた。

郷里の家の一部が郵便の局舎になつて居るから、母は取り敢えず、そこへ駈けて行く。併し、私からの通信は来て居ない。昨日も来なかつた、今日も来ない、いや、これで一週間目だ、半月目だ、私は幼時極めて虚弱で、よく病氣になつたから、知らぬ他國で寝付いて居るのではなからうかと、私からの通信を手にするまでは、母は只管氣を揉むのだが、生憎、私は手紙を書くことが、甚不得手である。私は筆まめだと人に云はれて居る、或はさうかも知れない、外に藝當のない人間だから、本を讀むか、物を書くか、それが私の道樂だが、手紙を書くことは、不思議に、昔から嫌ひである。況して、高等學校時代のことである。母上様御機嫌如何に御座候哉などと云ふ手紙は、さう度々書けるものではない。

斯くして、母は毎朝々々手紙を待つて居るが、手紙は滅多に來ない。そこで、母は最後の一策を講じた。それが則ち友人間で有名になつた所以だが、毎月一と月分の葉書三十枚又は三十一枚へ、表面には、郷里宛の宛書、裏面には、「無

事」「月日」と云ふ、四文字を、母自ら記載して、小包で、私へ送つて置く。それへ、私が毎日日附を記入して投函すれば宜いのである。之れならば、誠に一舉手一投足の勞で、手紙を書くことの嫌ひな私にも、決して、むづかしい次第ではないのである。つまり、葉書日報で、母は自分で書いた葉書を、自分で受取る。馬鹿々々しい話だが、葉書を受取ると、私の無事だと云ふことだけは、判明する。それが、母のせめての慰安になる譯なので、毎朝、此の葉書日報を見て、母はほつと一息つくのであつた。

私としては、月日を記入して、投函するだけのことだから、最初は毎日勵行して居た。併し、それも永續しなかつた。机の上に、三日分、五日分が、空しく積重ねてある。同室の友人も流石に見兼ねて、時々は投函を注意して呉れる。それでも、つい怠り勝ちになつて來たが、しまひには、とても注意位では駄目だと云ふので、自ら筆を執つて、投函して呉れる友人が出て來た。代筆だが、月日の記入だけなのだから、本人の手と大した違ひはない。此の親切な友人は、臺灣總督府の管下に於て、模範的の良吏と尊敬せられる元の專賣局長、今の臺

北州知事の中瀬拙夫君である。

二

私の郷里は伊賀の山村だが、一高へ入學する時が、私の最初の上京で、伯父に連れて来て貰つたのだが、東海道の景色を見度かつたので、晝間の汽車にした。従つて、早朝に發車するのだが、停車場へは五里以上もある。だから、家を出たのは、朝の三時頃で、眞つ暗な道を、人力車が駈けて行くのである。家を出て十丁位な處に、橋がある。其の橋の袂に、暗闇の中に、ぼんやりと、一人の女が立つて居る。

それが母だつた。母は私を送出してから、細い近道を走つて来て、こゝで本街道を駈けて来る人力車を迎へて、二度目の見送りをしたのであつた。此の時は、母はまだ四十にはなつて居なかつたが、二十五で寡婦になつて、それ以來、一切の粉飾を却けて居た母は、人竝以上に遙かに老けて見えた。私は今も尙暗闇の橋畔に寂しく立つて、私の出立を見送つた母の姿を、忘れることは出來

ないのである。

三

一高在學の時、國語の試験に、古今集のうちで感吟二首を擧げて、其の理由を掲げよと云ふ問題が出た。私の書いたのは、次の二首である。

老ひぬれば、さらぬ別れのありと云へば、いよく見まくほしき君かな。

世の中に、さらぬ別れのなくもがな、千代もと嘆く（祈る）人の子のため。前の歌は、在原業平の母君、伊登内親王が業平に遣し給へるもの、後の歌はそれに對する業平の返歌である。此の二首を選んだ理由として、私は單に『母を思ひて』とだけ書いて置いた。

四

私の幼少の頃、母は私に對して、甚しく嚴格だつた。嚴格と云ふよりは、寧ろ苛酷だつた。前にも書いた通、父は早く死んだが、祖父母は生きて居て（尤

も、祖母は私の中學に入る前年に死んだ、此の二人は又極端に私を可愛がつたから、私はいつても母を敬遠して、祖父母に親近した。母の監視を逃れて、祖父の膝下に趨る時には、窮秋の風霜を脱して、陽春の慈光に浴する思がしたのである。とにかく、母は甚しく嚴格で、私はお伽噺の松山鏡を読んで、繼母と云ふ者は、恐ろしいものだと思つた時に、自分の母も繼母ではなからうかと疑つた位であつた。

母は私を折檻する爲に、よく私を土藏の中へ叩き込んだ。土藏の中へ、私を叩き込んで置いて、外から戸を鎖す。仕方がないから、私は土藏の二階へ登る。小さい窓から、薄い光を受けて、こゝだけは、土藏の中でも、少しく明るいのである。其の土藏の二階は、亡父の耽讀した漢籍で一杯になつて居る。むづかしくて、讀めないが、赦免になるまでは、何をすることも出来ないのだから、一枚二枚開けてみる。私の極めて乏しい漢學の知識は、母に折檻せられた時、薄暗い土藏の中で得た副産物である。

此の峻烈な母の態度は、私の妻を迎へると共に、翻然として、一轉した。母

は私に關する一切の事項を、舉げて悉く妻に委ねたのである。旗幟誠に鮮明で、之れまでは、事細大となく、干渉しないでは居られなかつたのだが、之れからは、私共夫婦任せ、即ち私に關する事柄は、總べて妻の專任と云ふことになつた。それも、母は決して口に出して宣言した次第ではない、勿論お互に約束した譯ではない。母自ら創意し、母自ら實踐したのであつた。

母は舊藩時代の大家屋の家の末娘で、家族親戚一同の愛を鍾めて育つたのだが、女大學式の教養を受けて、其の精神は母の心骨に徹底して居る。老ひては子に従へと云ふ訓言を、母は文字的に墨守して、其の訓言の實踐の時期を、私の結婚の時と、母自ら固く決して居たのであつた。

母は十數年前に東京へ來て、私共と一緒に住んで居るが、少くとも、私には、絶対に干渉はしない。私は三十になつてから、酒を飲み初めた。幾干もなくして、私は相當の酒飲みになつてしまつたが、母は私に對して、飲酒は善いとも、悪いとも、何とも云はない、黙つて居る。ただ私の歸るまでは、決して眠らない。一時になつても、二時になつても、床へは入るけれども、決して眠らない。

酒に酔つて居ると、出先や、途中で、いかなる失態があるかもわからない、又、いかなる災難に遭ふかも知れない、電車に轢かれたり、川に落つこちるやうなこともあり得る。それが心配で、眠れないのである。

併し、眠れないと云つては、干渉がましくなるから、眠つて居るやうな風を装つて、黙々乎として、心の中で、私の無事な歸宅を待つて居る。之れには、實は私も當惑した。外で飲んでも、まだ飲み足りないやうな時には、歸つてから、一杯やり度いのだが、母が私の爲にまだ起きて居る様子だから、飲み度いのをつい辛抱して、不平を夢に包んで、眠る。

然るに、私も感ずるところあつて、昭和二年の春に、斷然禁酒した。それ以來、一滴も飲まない。此の分では、將來絶対に、杯を口にしないで済みさうである。併し、例に依つて、母は私に對して、禁酒が善いとも、悪いとも、何とも云はない。たゞ、私が禁酒してからは、一定の時刻が來れば、私の歸宅が遅れても、それに構はず、すや／＼と眠つて居る。

私はたつた一人の子だが、母はよく／＼一人つ子には懲りたものと見えて、子供は多い方が宜いと、いつも云つて居る。私には四人の子供がある。男ばかりで、一向母の手助けにはならないが、母は喜んで、孫達の面倒を見て居る。四人のうちで、長男は一高を卒業し、二男は今在學中で、寄宿舎に入つて居るが、一高とは頗る距離だから、散歩の序に、よく歸つて來る。葉書日報の必要は全くないのである。

うそが役に立つた話

一

うそは勿論禁物である。私と雖、うそを憎み、うそを卑しむ點に於ては、敢て人後に墮つる者ではないが、うそのなかにも、時には、已むを得ないうそ、罪のない、上品な方便としてのうそ、所謂ホワイト・ライもある。軽いユーモアが、うるさい世の中を明るくするやうに、面白い、晴れやかな、有益なうそもある。

プロイセンの國王フリードリッヒ・ウイルヘルム二世が、或時多くの人々を招いて、御馳走をした。其の頃は、國王も餘程の高齡で、齒が大抵抜けてしまつて居たので、其の言ふことは、まるでわからなかつた。併し、晚餐の席上で、國王が何かくくと云ひ出すと、附近の人々は、さも面白そうに笑つて、な

かでも、宰相のシェーレンブルグは聲を張りあげて、からくと笑つた。國王が何か冗談を云つたので、それに合槌をうつたものと見える。詩人のゲニクも招かれて居たが、國王の言つたことがさつぱりわからなかつたので、シェーレンブルグに、そつと尋ねた。

「陛下は今、何とおつしやつたのですか。」

「いや、私にも、まるでわからないのだが。」

「それでも、あなたは大笑お笑ひになつたやうですが。」

「はう、笑つた理由かね？ 大きな聲じや云へないが、實はこれも職務の一つでね。」

堅苦しいプロイセンの宮廷にしては、これなどは、餘程上出来な、しやれたうそである。

二

被告人をだまして自白させるのは、甚以て宜しくない。併し、左様な鹿爪ら

しい議論を離れて、巧みなうそが犯罪捜査に功を奏した例は、尠くない。印度の昔話だが、或富豪の家で、指輪が一つなくなつた。多数の召使のうち誰かゞ、窃取したに相違ないのだが、扱、誰だか一向わからない。そこで、富豪は召使全員を呼び寄せて、箱の中から、細い竹の棒を、箆を抽くやうに、一本づつ、取らせて、各自の棒を、明日こゝへ持つて来て貰ひ度い、神様のお告に依ると、指輪の犯人の取つた棒は、今晚のうちに、一寸程伸びるそうだから、それで、犯人をきめるのだ、と云つた。果して、召使のなかに、犯人が居たのだが、其の犯人は、自分の取つた棒を一寸程切つて、短くして、翌日、それを主人に差出した。主人の云つたことは、眞つ赤なうそで、總て同じ長さの棒を取らせたのだから、わざ／＼短くして差出したのが、則ち脛に疵持つ犯人だつたので、すぐに其の場で捕へられた。

今一つ、南米にあつた話。或西班牙人が騎馬で曠野を旅行して居たが、其の馬が怪我をして、動かなくなつた。そこへ、一人の印甸人が馬に乗つて、來合せた。印甸人の馬は逞しい逸物だつた。そこで、西班牙人は亂暴にも印甸人を

引きずりおろして、其の馬に乗つて、駈けて行つた。然るに、其の翌日、偶然に、隣の町の名主の家の前で、被害者の印甸人が馬泥棒の西班牙人に出逢つたので、馬諸共西班牙人を、名主の前へ引つ立てた。名主は裁判の役目を帯びて居るから、出訴したのである。併し、西班牙人は白状しない。これは自分の馬だ、自分は此の馬を仔馬の時から、育て上げたのだと云ひ張つた。そこで、印甸人は突如として、自分の上衣で、馬の顔を包んで、『宜しい、仔馬の時から、此の馬を育てたのなら、よく知つて居るだらうが、此の馬は片目だ、悪いのは、右か、左か、さあそれを云つて見ろ』と訊ねた。『右さ』と何氣なく、西班牙人は云つたが、上衣を取つてみると、兩眼涼しく、はつきりと輝いて居る。馬は片目ではなかつたのである。西班牙人は直に有罪と判定せられた。

三

序に、うそが役に立たなかつた話。

之れは支那の『矛盾』の話によく似ては居るが、實話である。近頃、我國で

も、防弾チョッキと云ふ調法なものが出来たとか、出来ないとか云ふが、之れは、英國の防弾ジャケツの話である。

ウォーターリーの凱旋將軍、ウエリントン公に、防弾ジャケツを賣りに來た男があつた。此のジャケツを着て居れば、どんなに強力な彈丸でもはね返す完全無缺な發明品だと云つて、高價にそれを賣込まうとしたのである。ウエリントン公は『成程、結構なものだね、そこで、一寸、君、それを着てみたまへ』と云ふ。云はれるがまゝに、其の男は防弾ジャケツを着た。其の時、ウエリントン公は從者を呼び付けて、『さあ、此のジャケツを其の拳銃でうつてみる！』と命令した。防弾ジャケツの先生、眞つ青になつて、戸外へ飛んで行つた。

四

最後に、うそに縁のある面白い話。

亞刺比亞に、アハメツドと云ふ人が居た。アハメツドは一頭の名馬を持つて居たが、之れが大そう自慢で、凡そ世の中に、此の馬を追ひ越す馬はない、此

の馬こそ天下第一の駿足だ、と誇つて居た。然るに、或夜、泥棒が此の馬を盗んで、それに乗つて、逃げて行つた。まもなく、アハメツドはそれに氣が附いて、別の馬に乗つて、泥棒を追跡した。アハメツドは元來馬術の達人で、馬を走らせることは、遙に泥棒を凌駕して居たので、刻一刻、泥棒に近付いて、あはや、泥棒に追つ付きそうになつて來た。泥棒に追つ付けば、大切な馬を奪還することが出来るのだから、勿論大に結構なことだが、此の瞬間に、アハメツドは考へた。おれが泥棒に追つ付けば、あの馬を追ひ越したことになる。おれは、いつも、あの馬は斷じて外の馬に追ひ越されないと廣言して居たのだ。今、おれが泥棒に追ひ付くと、それがうそになる、おれはうそつきにはなり度くない、何とかして、泥棒をうまく逃げさせてやり度いものだ、と考へた。そして、よく見ると、泥棒は例の名馬を御する術を知らない、其の馬は耳を引つ張ると、まつしくらに駈けるのだが、泥棒はそれを知らない。そこで、アハメツドは泥棒に教へた。『耳を引張れ〜』泥棒は教へられるまゝに、馬の耳を引つ張つた。果して、名馬は疾風の如く、行く手をさして、駈け去つた。アハメ

ツドは消え行く自分の名馬の影を眺めて、心の中で云つた。「おれはうそつきじやないく。」

天 罰 の 話

因果應報とか、天網不漏とか申します。全く、その通で、此の話も、其の一例に過ぎないのです。

今から、三十年程前のことです。巴里の或町のフリーエと云ふ婆さんが、行衛不明になりました。實は殺されたのですが、犯人もわからなかつたし、屍體も出て来ませんでしたから、行衛不明と云ふことに、なつて居たのです。

此のフリーエと云ふ婆さんは、佛蘭西には、よく斯様な人が居るのですが、しみつたれな、大金持で、巨萬の財産を持ちながら、入費が惜しいと云ふので、小さい家に、たつた一人、寂しく、暮らして居たのです。

フリーエ婆さんには、二人の子供がありました。息子と娘とで、息子は無頼漢

と云つても宜い位な、やくざ者でしたが、フリーエ婆さんと別居して居て、此の話には、直接の關係はありませぬ。娘——と云つても、此の話の當時には、既に、中年の女になつて居ましたが——は、ロベールと云ふ酒の販賣商の細君になつて、勿論、フリーエ婆さんとは、別の所に、住まつて居ました。

フリーエ婆さんの娘の亭主、即ち、酒商のロベールは、もとは相當の資産もあつたのですが、フリーエ婆さんとは、反對で、贅澤で、しかも、競馬狂——それも負けて居るばかりなので、身代はだん／＼左り前になつて來たのです。

ロベールは殆ど無一文になつて來ましたが、たつた一つの希望は、妻の母のフリーエ婆さんが死ぬると、其の財産の半分が、(フリーエ婆さんの子供は二人ですから、一人に付て、其の半分づゝ) 自分の妻の手に入つて來ると云ふことでした。もと／＼ロベールは不人情な男で、しかも、ひどく、金に困つて居るので、すから、義理の親のフリーエ婆さんの死ぬるのを、今か／＼と待つて居たのでし

た。

フリーエ婆さんは、今は、餘程の老齡で、しかも、大分重い病氣に罹つて居ました。そこで、ロベールはフリーエ婆さんの死期が近づいたと思つて、知合ひの人から、三ヶ月の期限で、千圓ばかり借用しました。三ヶ月のうちには、フリーエ婆はきつと死ぬる、死んだならば、巨萬の財産の半額が妻の所有となるのだから、そのなか／＼、辨濟すればいゝ、と豫定を立てたのでした。

然るに、ロベールのあてが外れました。フリーエ婆さんの病氣はすつかりなほつて、以前に倍した健康體になつたからです。そこで、困つたのは、ロベールです。そのうちに、借金の期限は來てしまひました。

斯くして、遂に、ロベールは忌まはしき犯罪の決心をしました。即ち、義理の親たるフリーエ婆さんを殺す覺悟をきめたのです。義理の親を殺さうと云ふ大

悪人だから、其の計畫もなか／＼緻密なもので、まづ、自分の妻がさとらないやうに、うまい口實を設けて、妻を遠方（マルセイユ）の親戚へやつて、暫くそこで逗留させることにして、其の次に、巴里の郊外の寂しい場所で、明き家を一軒借受けて、自分は此の度閑靜な別荘を買受けたから、見に来て下さい、と云つて、フリーエ婆さんをおびき寄せて、其の明き家のなかで、婆さんを殺し、屍體は、明き家のなかに豫め掘つて置いた深い穴に、埋めてしまふ、そうすれば、此の極悪罪も發覺の虞はない——と云ふ計畫で、尤も、自分一人では、工合が悪いので、バスシアンと云ふ悪漢を、共犯として、雇入れたのです。バスシアンは札付きの悪漢で、前科もある男でした。

ロベールとバスシアンとは、計畫通に、フリーエ婆さんを殺して、穴へ埋めて、何喰はぬ顔をして、借りた家を、持主に明渡しました。これならば、犯罪の發覺する氣遣ひはない、と悪漢二人は安心して居ました。其の頃の佛蘭西の法律では、犯罪の後十年過ぎると、刑罰を受けないことに、なつて居ましたから、

十年此の儘發覺せず済めば、大丈夫だ、と彼等は思つて居たのでした。

現、ロベールは、フリーエ婆さんが居なくなつたのだから、財産の半分をそれぞれ相続人の名義にして貰ひ度い、とお役所へ願つて出ましたが、お役所の方では、フリーエ婆さんは死んだのではない、行衛不明になつたゞけなのだから、すぐには、財産は渡されぬ。死亡の證據が出て來ない限は、行衛不明になつた時から、十年経過しなければ、財産は渡されぬ、と申渡しました。それを聽いて、ロベールはがっかりしました。金が欲しさに、しかも、一日を争ふ急迫な事情の爲に、フリーエ婆さんを殺したのだが、十年過ぎなければ、財産を渡してくれない。全く、此の位、あての外れたことは、ないでせう。死亡の證據を出せと云はれても、それは、出せないに、きまつて居ます。それを出せば、自分の命がなくなるのです。ロベールはたゞもう茫然としてしまひました。

借金
X
X
X
X
借金は返さなければ、ならないし、バスシアンへは、お禮の金をやらなければ

ば、ならない、これが又莫大な額であることは、勿論です。そして、バスシア
ンからは、矢の催促で、早く呉れなければ、自分は警察へ自首して出る、と云
つて、脅迫して來ます。ロベールは今全く自分の食ふべきものも食はないで、
借金とバスシアンへのお禮とへ、少しづつ、金を入れて居ました。

併し、犯罪事件は發覺しませんでした。警察でも、ロベールが怪しいと睨ん
だのでしたが、何しろ、屍體が出て來ないので、確證が擧がらない、その爲に、
ロベールは起訴にはなりませんでしたが、ロベールは犯罪に因つて、何を得た
か。バスシアンに對するお禮の債務を負擔したゞけで、貧乏の上塗りをしたに
過ぎないのです。今は、赤貧洗ふが如く、前にも書いた通、その日／＼のパン
にすら、窮してしまひました。

話變つて、其の間に、バスシアンは別の犯罪（竊盜及強盜）で、二度、監獄
へ行つて居ました。最後の懲役に行つて居るうちに、同じ監獄に居た仲間の囚

人に、ロベールに頼まれて、フリーエ婆さんを殺したことを、話して聞かせまし
た。此の囚人は無期懲役囚人で、娑婆へ出る氣遣ひはないのだから、此の囚人
に、いくら眞實を語つても、自分達の犯罪が發覺する虞はない、と思つたから
でした。

其の後、まもなく、其の監獄に、出火がありました。其の時に、バスシアン
からフリーエ婆さん殺しの犯行を聞いた囚人が、抜群の働をして、煙に捲かれて、
死にかけて居た看守を、猛火のなかゝら、救ひ出しました。其の手柄に因つて、
彼れは、無期役囚人だつたが、減刑の恩典を受けて、釋放になつたのです。

出獄すると共に、彼れはバスシアンから聞いたフリーエ殺しの顛末を、警察に
密告しました。フリーエ婆さんを埋めたことも聞いて居たので、そのことも、警
察へ報告しました。於是乎、ロベールとバスシアンとは、愈々正式に起訴せら
れました。それは、犯行後、實に九年八ヶ月のことで、今二ヶ月過ぎると、即

ち、犯行後十年になると、起訴を免れるのですが、その危い瀬戸際だったので

す。
x
x
x

二人が有罪の判決を受けたことは、勿論です。

夏と犯罪と婦人

夏と惱ましい罪

夏の犯罪の特徴を云ふと、どうしても、性に関する犯罪を挙げなければならぬ。勿論、正確な統計上の数字はわからない、極めて軽微なものは、警察官の方で不問に付するだらうし、縦令全然不問に付せないとしても、説諭位で済ませることが多いだらうから、犯罪の實數を知ることが、まづ不可能だが、夏の犯罪と云へば、誰しも性に關する犯罪を想像する。

然らば、性に關する犯罪が、何故に特に夏に多いのであるか。それはまづ服装の問題である。薄い着物、肉體の輪廓を其の儘に見せるやうな着物、それは女人の美しさを如實に示すものではあらうが、それが同時に、男性の劣情を唆る資料となつて、或種の男子に、鬼畜のやうな心を起させることになるのである。

る。

暑さと性の犯罪

次に又考ふべきは、気温と犯罪との関係である。暑い國では、男女共に早熟であり、常に早熟であるのみならず、性に對する要求が一般に熾烈である。従つて、性に關する葛藤は、どうしても温い國や暑い國に多く、歐羅巴でも、伊太利や西班牙では、此の種の惱ましい犯罪の數が多い。

南洋の未開人種

南洋の嶋嶼は此の點に於ては、殆ど典型的であると云つて宜い。土人の文化は勿論進んで居ない、天恵に依つて、食物の心配はない、到る處に、旨い果物が自然に出来るから、それを食つて居れば、それで済む、全く食ふに困らない人達である、食ふに困らないのだから、貧苦の末の盗みと云ふことがない、又財産を蓄積する必要がなく、従つて其の慾望もないのだから、詐欺横領と云つた

やうな財産犯が稀で、財産上の欲求はないが、強い日光の直射に依つて狂はしきまでに刺戟せられる性の欲求は、男女を驅つて、忌まはしき罪に導く。されば、犯罪と云へば殆ど悉く性に關する犯罪である。敢て南洋の嶋嶼の全部だとは云はないが、少くとも其の或嶋々には、今以て斯様な境地もあるのである。

臺灣の生蕃の性の徳義

暑い國には、性に關する犯罪が多いのであるが、其の例外は臺灣の生蕃である。臺灣の生蕃は重に山地に住んで居るから、冬は相當寒いけれども、四季總括的に云へば、勿論熱國の種族である。此の熱國種族なる臺灣の生蕃は、性に付て、極めて嚴肅であり、且道徳的で、要するに、品行の正しい種族である。従つて、性に關する犯罪が甚少いのである。殊に生蕃の七種族中の一たるヤミ族は、臺灣南海の孤島、紅頭嶼に住む僅に千六百餘人の小種族であるが、性に關する犯罪が殆ど絶無なるのみならず、窃盜もなければ、詐欺もない。若し萬一犯罪人が出來ると、一同之れと絶交する、絶交が最大の刑罰になつて居る。面

白い制度である。

夏は性に關する犯罪が多い、其の理由の一つは、着物が薄くなつて、劣情を挑發するからだと云ふことは、前に書いたが、不思議なことには、性に關する犯罪の少きことに於て、殆世界第一とも云ふべき臺灣のヤミ族は、男女殆全裸である。

婦人に對する犯罪に付ての刑の輕重

婦人に對する犯罪、即ち婦人が被害者である犯罪、之れには勿論種々ある。殴打、傷害、其の他種々の犯罪を包括して論ずるのであるが、婦人に對する犯罪に付ては、歐米では一般に之れに課する刑罰が重い。男子に對する犯罪よりも、婦人に對する犯罪の方が重く罰せられるやうである。英國でも、今は退職して専ら植物の觀賞方面の研究をして居られる前判事のフイリモア卿の如きは、特に婦人に對する犯罪に付て、思ひ切つて重い刑罰を言渡したものである。婦人に對する犯罪の被告人は、自分の事件の係判事がフイリモア卿だと云ふこと

を聴くと、それだけで、縮みあがつたものである。或一部の人は、英國近代の婦人の地位の高上は、此のフイリモア卿の裁判に負ふところが多いと云つて、卿を徳として居る次第である。

或米國人の話

然らば、何が故に、特に婦人に對する犯罪を重く罰しなければならぬか。其の理由に就て、或米國人は云ふ。「婦人は貴いものである、えらいものである、其の貴い、えらいものに對して加へられた犯罪だから、重く罰しなければならぬのは、當然である。」

併し、此の米國人の云ふところは、寧ろ不可解である。婦人は貴重であると云ふ、勿論、婦人は貴重であるが、男子よりも貴重であると云ふならば、聊か腑に落ちないところがある、一般的に、男子が當然婦人よりも貴重であると云ふことは、正しくはないだらう、乍併、それと反對に、婦人が當然に男子よりも貴重だと云ふことも、同様に不合理だらう、成るべくは、其の貴重性に於て、

一般的には、男女同等に考へて貰ひ度いものである。されば、右の米國人の説
明に依つては、婦人に對する犯罪を特に重くする理由を、是認することが出来
ない。

婦人に對する犯罪を特に重く罰することが、悪いと云ふのではない、其の理
由として、右米國人の説明するところは、不可解だと云ふのである。

英國法廷のスポーツマンシップ

婦人に對する犯罪を重く罰する理由に付ては、英國法廷では、之れをスポー
ツマンシップの思想に基くものと考へて居る。流石に、此の方が理義整然とし
て居る。首肯するに足る立派な條理である。

英國法廷に於て高調せられるスポーツマンシップは、公明正大の道である。
紳士道である、人間道である、中古に於ける騎士道と其の趣を同じくし、我國
の武士道と其の揆を一にする。勿論、競技に勝つとか、レコードを破るとかの
スポーツの道ではない。

此の英國法廷のスポーツマンシップは、公明正大の道であるが故に、卑怯な
事を排斥する、陋劣な事を嫌忌する。犯罪に公明正大なものはないが、犯罪の
中でも特に卑怯なもの、陋劣なものはある。此の特に卑怯、陋劣な犯罪、即ち
最下等の犯罪を重く罰する。而して、婦人に對して毒手を伸ばす犯罪は、卑怯
であり且陋劣である、即ち最下等の犯罪である。従つて、それが重く罰せられ
るのである。英國では、泥棒仲間でも、婦人に毒手を伸ばした犯人は、泥棒仲
間の面汚しとあつて、極度に排斥せられる。

ペーカー大佐事件

それに付ても、思ひ出されるのは、ペーカー大佐事件である。

一八七五年の出来事だが、現役陸軍大佐で、嘗ては皇太子エドワード殿下(後
のエドワード七世) 附の武官であつて、上下の信頼を篤くしたヴァレンティン・
ペーカーが、汽車の一等室で、乗客の若い婦人、テイツケンスン嬢に、突然接
吻した。

二人は偶然同じ汽車の同じ一等室に乗り合はせて、初対面の人達だつたけれども、いつのまにか、話し合つて、互に旅のつれづれを慰めて居たのだが、話をして居る間に、遽に、ペーカー大佐は、ドイツケンズン嬢に接吻した。ドイツケンズン嬢は驚いて、大聲を揚げたから、ペーカー大佐は、直に他の乗客に捕縛せられた。

接吻しただけで、それ以上の悪事には及ばなかつたのだが、相手の意志に反して接吻しただけでも、勿論、悪いことである。ペーカー大佐は嚴格な、高潔な人で、紳士として、武人として、何人にも尊敬せられ、推重せられて居たのであつたが、所謂魔がさしたとでも云ふのであらう、若い美しい婦人に魅せられて、一回の接吻を敢てしたのである。

ペーカー大佐は罪を悔ひた。そして立派に服罪した。自分の犯罪には、辯解の餘地がない、紳士として、武人として、最卑怯な最陋劣な振舞を、自分はそのたのである、自分の非行は、當然刑罰に値する、自分の爲に、未練な辯護をして呉れるな、と其の辯護人に云つた。

固より、其の罪は憎むべきであるが、ペーカー大佐の之れまでの素行、品格、功績に對し、又、法廷に於ける其の深い態度に對して、何人も、ペーカー大佐に同情した。

判事は、ペーカー大佐の素行、品格、功績は、十分にそれを認めた、そして、法廷に於けるペーカー大佐の深い態度に、好意を持つた。併し、其の罪は許すべきものではない、懲役十二月に加ふるに罰金五千圓と云ふ重刑を申渡した。ペーカー大佐は此の重刑に服したが、官職に付ては、辭表を出したけれども、辭表は無視せられて、官位榮譽其他一切の地位特典を剝奪せられた。

前にも書いた通、ペーカー大佐に對する同情者は多かつた。殊に皇太子殿下附の武官として、功績を挙げた人だから、其の方面から、特赦の運動が試みられたけれども、ガイクトリヤ女皇は最後まで、ペーカー大佐を許さなかつた。

ペーカー大佐は服役後、土其古に渡り、恰も當時露土戦争中だつたので、土其古軍の爲に、一生懸命に働いて、土其古の陸軍中將になつたが、後更に埃及に赴いて、警察制度の確立に盡瘁した。犯罪後の大佐は、一意贖罪の爲に、身

命を棄て、公共の奉仕に當つたのである。彼れは犯罪の後十二年、六十歳の時に、埃及で、瘧疫の爲に死んだ。

或る常習泥棒の話

私が現に倫敦の法廷で傍聴した事件であるが、或常習犯の泥棒が、小商人の細君に捕へられた。家の中へ入つて、金品を物色中に、その細君に捕へられたのである。細君は、證人として出廷して居たが、成程、小太りに太つた、元氣の好きさうな中年の婦人だつたけれども、巴、板額と云つたやうな、強力な女とは見えなかつた。此の細君が、たつた一人きりだつたのだから、喧嘩をすれば、泥棒の方が、勝つにきまつて居る。それでも、泥棒は細君に捕へられたのである。

泥棒は法廷で、當時の模様を眞つ直に申立てた。「此の御婦人を叩きのめして逃げることは、それは容易なことでしたが、私も英國人でございます。婦人を叩きのめすことは、卑怯だと云ふことを存じて居ます。婦人を叩きのめして逃

げるよりも、私は、寧ろ喜んで、監獄に送られませう。」

判事は、泥棒の此の陳述を賞揚した。そして又、例の細君の勇敢な行爲を賞揚した。此の細君には、判事の推薦に依つて、五十圓の賞與が與へられた。授與式は其の儘其の法廷で行はれたが、泥棒は自分を捕へた女が褒美を貰ふのを、嬉しさうに眺めて居た。其の法廷に於ける唯一の異邦人たる私も、其の光景を、微笑んで、熱視して居たのであつた。

マ グ ナ ・ カ ル タ

ロンドンの夏は晴れやかである。草花の五月、木の華の六月から、空が眞つ青に、日光は微笑んで、七月、八月も、ひどい暑さではない。

ロンドンの人は、機嫌の好い時には、いつでも、『夏のやうだ』と云ふ。實際イギリスでは、夏が良い季節である。其の良い季節の夏に、裁判所では、ゆつくりと長い休暇をとる、あまり暑くはないのだから、仕事をするのに、一向差支はない筈で、夏の間長い休暇をとる理由が、わからない、かやうな良い季節に、長い休暇をとるのは、どう云ふ譯だと、或判事に訊ねると、季節が良いから、休むのだ、仕事が苦しいから、休むのぢやない、良い季節にうんと遊ぶために、ゆつくり休むのだと云ふ。成程、イギリスの裁判官は、落着いたものである。

休暇の有無如何に拘らず、ロンドンの夏は愉快だが、此の愉快的夏の或日に、

イギリスの誇とするマグナ・カルタが出来たのである。マグナ・カルタは云ふまでもなく、イギリス憲法の基礎で、或意味に於ては、近世諸國の立憲制度の母胎だが、其の出来たのは、一二一五年の六月十五日、場所はロンドンの西十里、ウインゾアに近いテムスの中の小島で、ジョン王がそれを裁可したのである。晴れやかな夏の日に、晴れやかな境地で、此の不磨の大典は成立したのである。夏になると、私はロンドンを思ひ出し、マグナ・カルタを想ひ起す。

マグナ・カルタの正本の出来たのは、其の月の十九日だが、今も其の一通はブリテイッシュ博物館に残つて居る。何しろ、七百餘年を経て居るのだから、どす黒く、煤びては居るが、丹念に眺めて居ると、拾ひ讀みは出来る。

マグナ・カルタの内容は雜然として居る。しかも、多くはウイリヤム一世以來、特にヘンリー一世以後の特許を列掲したものはあるが、『何人と雖、貴族の裁判又は國法に依るに非ざれば、逮捕、監禁、沒收、追放其の他の不利益を受くることなし』、『何人と雖、其の權利又は正義を賣られ、拒まれ、又は、阻まるることなし』と云ふ雄渾な章句が、此の鐵則に九鼎の重みを加へて居る。

其の外にも、證據に依らず、流言に基いて、處罰することなしと云ふ原則や、巡回裁判の制度等も確立せられ、裁判に關する事項が、此のマグナ・カルタの重大な要素となつて居るのであつて、千古ゆるぎなき司法の礎は、此の大典に依つて樹立せられたのである。此の意味に於て、イギリス憲法の骨子は司法權の尊重と云ふことに存するもの、と云つて宜い。

私がマグナ・カルタの遺蹟を訪れたのは、矢張、夏の日だつたが、河はゆるやかに流れて、柔かな眞晝の日の光に、木々の緑は輝いて居た。

富士遠望

私の郷里は伊賀の山村で、伊勢との國境になつて居る。人里隔へた峠の上に、一軒の宿屋があつて、舊藩時代に、藩主から、種々の特權を與へられて、相當威張つて居たものださうであるが、其の宿屋が、私の祖母の實家である。尤も、明治の十年代に死に絶えてしまつたさうで、それ以來、何にも残つて居ない。私が六つか七つの頃、たつた一度、祖父母に連れられて、宿屋の跡を見に行つたことがある。石だけは残つて居たが、小山を一つ、庭に包んで、大分大きなものであつたらしい。其の小山に登つたが、丁度、晴れ渡つた秋の日で、明鏡の如き伊勢灣のかなたに、遠く小さく、しかも、天に近く、綺麗な山がはつきりと見えた。「あれ、勿體ない、富士のお山が。」と祖母は叫んだ。伊賀の山から富士の見えるのは、餘程珍しいことで、毎日山へ入つて居る山男ですら、一生に一度、見るか見ないかと云ふ程ださうである。ところが、私は生れて始めて

山へ登つて、富士を見たのである。「お前はきつと運がえゝわい。」と祖父は喜んだ。祖母は私の中學へ入る前の年に死んだが、祖父は私が判事になるまで、生きて居て、よく東京へ來たが、東京へ來れば、祖父はすぐに富士を眺めに出かける、勿論、いつも私がお伴である。従つて、私は東京の山の手方面で、どこかの町から、どこの崖から、どこの料理屋から、富士がよく見えるか、大抵の場所は、知つて居る。併し、富士の見える日は、そんなに多くはない。朝見えても晝は見えないこともある、今日こそは、はつきりと見えるだらうと、喜び勇んで行つて見ると、富士だけが、生憎、雲に包まれて居ることもある。富士が見えると、祖父は衷心から歡んだが、見えないと、祖父よりも、まづ私の方が、がっかりした。

私の父は私の幼い時に死んだので、祖父は唯一の男親なのだが、富士を見る毎に、私は懐かしい祖父を思ひ出す。去年、茅屋の一部を修築したが、三階と云ふと、大袈裟だが、富士を見る爲に、とにかく二階の上に、一つ小さい部屋を作つた。其の部屋からは、居ながらにして、富士を、眞つ正面に眺められる。

晴れた朝は、起きるや否や、いつも飛んで上つて、西の空を望む。富士が見えると、一日氣持が好い。そして、祖父が生きて居て呉れたらばと、しみじみと思ふ。

富士が見えると、氣持が好い、伊賀の山で富士を見た時に、お前は運がよいと、祖父は云つた、實際、富士の見た日は、私には、幸運の日のやうである。然るに、富士が見えて、しかも、甚幸運でなかつたことが、たつた一度ある。ごく最近のことである。八月の初旬に、伊豆の大島へ渡つた。初めて行つたので、見るもの、聞くもの、悉く興趣を覺えたが、元村の宿屋から、鮮やかな富士の姿を眺めた時は、飛び立つ程、嬉しかつた。土用のうちに、大島から、富士の見えることは、寧ろ極めて稀ださうである。扱、其の翌朝、大島から下田へ行く時に、海がひどく荒れて、七轉八倒の苦しみに悶えた。歸つてから、郵船會社に勤めて居る親戚の者に、其の話をする、それは當り前のことだ、土用のうちに富士が見えると、きつと波が高い、横濱で、富士が見えると、船員はいつもいやな顔をするのだ、と云ふ。成程、さうかも知れない。

白鳥の心

英國チエルクムスフォードの或名家の邸内に、湖水があつた。三羽の白鳥が飼つてあつたが、二羽は夫婦で、一羽は雛だつた。此の雛が大きくなると、夫婦が揃つて、ひどく虐める。そこで、虐められた一羽だけ、別に湖水の片隅に離れて居たが、これが、大變な寂しがり屋で、首を垂れ、羽を潜めて、氣の毒な程、寂しさうにして居た。

丁度折よく、親戚の娘さんが逗留して、毎日、湖畔で寫生をして居た。娘さんを見ると、例の白鳥が駆けて来て、娘さんにくつ附いて、話こそしないが、まるで、お友達のやうに、寫生して居る間は、いつでも、側を離れない。二三ヶ月で、娘さんが居なくなつたが、同時に、白鳥は寂しさうに、物思ひに沈んで居る。

暫くして、植木屋が垣根の手入れに来たが、例の白鳥は此の植木屋に懐いて、

喜んで、其の相手になつて居た。併し、垣根の手入れが済んで、植木屋が來なくなると、白鳥は又憂鬱になつた。

然るに、程經て、白鳥は遽に元氣附いて來た。寂しがり屋の先生に、好い相手が出來たのである。それは一尾の大きな鱒で、白鳥はいつしか此の鱒と仲好しになつたのであつた。鱒は無心だが、白鳥の羽蟲を餌にする爲に、いつも白鳥のお伴をする、それで、寂しがり屋の白鳥も、大に慰められて、元氣附いて來たのであつた。

併し、悲劇は遂に來た。此のことを知らない泊り客が、其の鱒を釣り上げた。鱒を取られると、白鳥は狂氣の如く、泊り客に飛び付いて來たが、鱒の死んだのを見るや、悲しさうに、いぢらしい可憐な姿で、とぼくと、今は友なき冷かな湖水へ、歸つて行つた。

此の話は、數年前に物故した英國の名高い鳥類學者で、動物愛護の主張者、ハドスンが的確な證據を擧げて、傳へたところである。

親を貰つた話

一

私の郷里は山國の、しかも水源の村だから、四方山に圍はれた小盆地だが、村としては、以前から植林に意を用ひ來つた結果、良質の木材が出来るので、經濟の上では、恵まれて居た。左様な工合で、村内に乞食と云ふものがない。只だ一人、こゝに書く八公（之れは假名である）は、此の比較的に餘裕のある村に於ては、不思議な存在だつた。

八公は乞食ではない、相當の家に生まれて、教育こそなかつたが、物の道理も辨へて居たし、六尺豊かな骨格に、溢れるばかりの體力を持つて居たので、仕事は立派にやつてのけるのだが、貯蓄と云ふ觀念は全くなかつた。あればあるだけ、使つてしまふ。尤も使ふと云つたところで、八公の道樂は食ふことだ

けで、一圓でも、十圓でも、手にあるだけの金は、必一度の食事に、費消してしまつた。身體が人竝外れて大きいのだから、大食の必要もあるのだらうが、或時、村の人に連れられて、伊勢詣をして、泊つた宿屋で、一人で其の宿屋に放いてあつた飯を、全部食つてしまつたと云ふことである。併し、不思議なことには、八公の大食は間歇的で、金のある時に、あるだけ食つてしまつて、金がなくなれば、食はずに、寝て居るのである。決して、他人に食を求めると云ふことはない、だから、仕事があれば、食ふ、仕事のない時は、寝て居る、親代々の家は賣つてしまつて、掘立小屋に住んで居た。着物は一枚もなかつた、夏は、殆ど裸體だつたし、冬は、俵や菰を巻き附けて居た。

二

其の八公が或日、上下揃つた衣服を纏つて、村へ顯れた。人々は吃驚した。裸で居る筈の男が、着物を着て居るのだから、やあ八公が着物を着て居る、と云ふので、剽輕な連中が號外賣のやうに、家々を觸れて歩いた。子供等は外へ